

7 授業「ナイン」（第25回全日本中学校道德教育研究大会特別公開授業）

(1) 【指導案】

<1991年10月31日(木)>

道 徳 学 習 指 導 案

徳島県板野郡板野町板野中学校

3年B組 男子19名 女子18名 計37名

指導者 森 口 健 司

1 主 題 名 生 き る 絆

2 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

人間としての生き方とは何か。生きることを考えることが極めて少ない現代社会の中にあって、目の前の幸福を追い求め、安易に暮らしていこうとする世俗的な意味での幸福な生き方を求める生徒や大人が多い。しかもなお、人の一生は順風満帆な人生ばかりとは限らない。逆境にさらされたり、不運に遭遇したり、また裏切りや誘惑によって自己の正しさを貫けず、自分の能力の限界を感じ、生きる自信を失うこともある。

こうした中で、人間の弱さや醜さを自覚し、それをばねにして人間の崇高な面である強さや気高さを目指し、だれに対しても人間として温かいまなざしを向けるとともに、相手に対する思いやりや感謝や信頼に支えられた、人を人としていとおしむ心を深め合っていくところに、生きる喜びや幸福があると考え。

思いやりとは、単なる同情ではない。相手の立場に身をおき、自己のいたらなさに思いが及んではじめて相手を思いやる心が生じる。この深い自己省察による思いやりや感謝や信頼は、人間として生きる強い心の絆となり、相互に誠実に生きようとするより処になっていく。

主題名「生きる絆」も、人間として生きる絆が、思いやりを土台とし、深い信頼の中から培われていることを理解させたいという切なる願いを込めて設定したものである。

(2) 生徒の実態

社会の風潮も手伝って利己的・自己中心的になりやすく、目先の損得に目を奪われがちな日常の生徒の言動が危惧される。自分が優位に立っていたり、自分に都合のよい状況下では相手を思いやり支え合うことの大切さを理解し実践もしていると思われる。ところが、不利な立場や自分が損失を被る状況下ではどうだろうか。これまでに培った人間関係をよりどころとして自分を偽ることなく、相手を思いやり信じることができるだろうか。生徒一人一人の人生において、周囲の人々と信じ合って生きる喜びを求めさせたい。そして、その基となる信頼に足る友人関係を積極的に築いていこうとする意欲や態度を養ってもらいたいと願う。

本学級の生徒は、人間としての生き方を考える道徳の授業を通して、一人一人が信頼という固い絆で結ばれつつある。1学期後半、本校で実施された同和教育研究大会での道徳の授業において、A子が「私は3年生になるまでは、自分が部落出身であることを絶対かくしていこうと思っていました。でも、いろいろな資料を勉強し、みんなの意見を聞いて、その言っていることを本当だと信じたとき、この仲間だったら私の一番つらい思いを打ち明けられることができると思うようになってきました。今、私は二人の友だちに自分が部落出身だということを打ち明けています。まだ二人しか本当の友だちはいないけど、これからもっとたくさんの本当の仲間を増やしていきたいです。」と語る。

そのA子を支えるかのようにB子が「私もA子さんにそのことを打ち明けてもらったんだけど、自分の一番苦しい部分を打ち明けてくれたんだから、私も心を開いて頑張っていけないかと思うようになってきました。今、まだ二人にしか言えなかったかもしれないけど、もっとクラスの中の人たちがA子さんの気持ちを受けとめて、みんな今の時間を大切にしたいと思います。」と語る。

A子やB子の訴えに励まされてC子が「今、3年生でも、何人かの人が、自分が部落出身ということを全体学習なんかで言ったんだけど、今、A子さんが二人だけと言ったけど、ここにいる3Bのみんなの前や多くの先生方の前で言えたんだから、信じてくれたと思います。私も部落に生まれたんだけど、恥ずかしいと思ったこと一度も……なかったけど……はなけど言うて差別されたらいやじゃと思ってずっと言えなかったけど、このクラスの子だったら、信じることができるからこのことが言える。」と語る。

そのC子を支えるかのように、D子が「A子さんとC子さんが言ってくれたけど、これから今日打ち明けたことを後悔するようだったら、私やはいったい今まで何をしてきたんnaと思ってくれていいと思います。私も部落ということを言うた子を変な目で見ようなんて一つも思うてないし、見たらごっつい自分があほらしいなってくると思います。それで、この前読んだ本で心に残っていることなんだけど、一応世間で言う『親友』とは、親しい友と書いて何でも話し合える友だちということだけど、本当の親友とは、心の友と書いて自分の恥ずかしいところでも、何から何まで端から端まで話し合える友だちを心友というそうです。私もそんな心友をたくさんつくりたいです。」と語る。この授業は共感と連帯の絆に結ばれることの喜びや幸せを生徒一人一人がつかんでいく学習となった。

この授業の翌日の生活記録にE子が「今日の授業、涙を流して自分が部落出身だと語ってくれた友だちがいた。私は友だちが言ったとき、手を挙げるつもりでいたのに、何か友だちの存在が大き過ぎて、その友だちの言葉が思い切り、私の心の中の差別心を刺したような気がした。B子さんやF子さんが『このまま黙って下を向いているより、友だちの気持ちを受け止めて発表して』と言われたとたん、すごい心の中で熱いものを感じました。こんなに涙が出る程、この授業

に取り組んだのは初めてです。みんな3Bの仲間を信頼しているからこそ、泣きながら語ってくれた言葉なのに、今まで下を向いてよそ事を考え、ぶつかってきてくれる友だちにそっぽを向いていた自分が今日すごくはずかしかった。本当に顔から火がでるほどはずかしかった。私は授業の終わりに2回ぐらい手を挙げただけで、チャイムが鳴って発表できなかった。でも私は、私なりに今日みんなの前で語ってくれた友だちの言葉を体全体で受け止めたつもりです。最後に私をここまで変えてくれた3Bのみんな、それから先生に何かのきっかけで巡り会えたことを感謝しています。」と記してくる。

仲間を信じ自分をぶつける生徒、仲間の信頼に必死に応えようとする生徒、信頼という固い絆で結ばれつつある生徒たち、その絆をより確かなものにしていき、生徒一人一人が生涯にわたって、互いの存在を生きる支えとしていくことができるような絆とは何かを求め合い、このクラスの結束、絆を永遠のものにしたいと願い本主題を設定した。

(3) 資料について 資料名「ナイン」(井上ひさし)

井上ひさしが「ナイン」の中で示す主題は二つあるように思う。

その第一は、題名にあるように集団としての結束である。この結束は異常なまでに強固である。今風ではない。なぜ彼らは昔風とも思えるこのような結束に固執するのだろうか。

中村さんは「新道少年野球団は強かったねえ」と口癖のように言う。投手英夫の父親ということもあるが、優勝戦延長12回を戦った準優勝であるから大きな価値がある。これはもう父親にとっては誇りのようなものである。しかしその誇りを傷つけるのが当時の主将で四番打者、正太郎の行状である。できるだけ正太郎に触れたくないし、触れても「あいつの名前を聞いただけでめしがまずくなる」のである。確かに、正太郎はチームの中核であり、正太郎抜きに新道少年野球団を語ることはできないだろう。その証拠に口にしたくないと言いながら父親はそれまで以上に能弁になる。

正太郎の罪は旧友をだましたということで父親にとっては許し難いものであったにちがいない。しかも弱虫の八番打者の常雄まで正太郎のために自殺未遂を起こしている。

しかし、英夫も常雄も正太郎を訴えることもしないし、訴えるどころか感謝までしている。その気持ちは「おじさんにはわかりません。」とも言っている。このナインの結束は一体何であろうか。

まず考えられるのは、優勝戦をナイン一丸となって延長12回を戦って敗れたことである。勝者よりも敗者の方にドラマがあるというように敗者であったからこそナインの絆も一層大きく強かったのかもしれない。ナインにとってはまさに青春を懸命に生きた証明であったであろう。もちろん正ちゃんが日陰を作ってくれたという恩義もあったであろうし、正ちゃんはそういう存在でなければならなかったのである。しかし正ちゃんが日陰を作ってくれたということは、正ちゃん擁護の大きなきっかけであったかもしれないが、実は表層的、象徴的出来事であったと思える。そのような単に恩義に報いるものだけではなかったのではないか。その検証は井上ひさしの第二の主題に関わってくるように思うのである。

第二の主題は新道商店街への愛着である。「当時の新道には生活があった。」「新道は、ささやかではあるが、しっかりと自給自足しており、そこで小路全体に自信のようなものがみなぎっていた。……なんだかもろい通りになったような気がしてしかたがない。」「客を迎えるだけの、厚化粧だが、何だか素っ気ない小路に化けてしまったこともたしかだ。」という文章からも井上ひさしの並々ならぬ新道への思い入れと愛着が感じられる。もっと考えれば愛着というより愛惜の情さえ感じられるのではないか。

都会にしろ田舎にしろ刻々と変化していく。移ろうは世のならいかもしれないが、大切なものまで押し流していく世の移りかわりへの慨嘆がこの作品の主題となっているように思われる。この思いは「新道少年野球団は強かったねえ」という父親の言葉にもある。父親にとっては準優勝にしろ新道少年野球団は強くなければならなかったのである。そしてナインの一人一人の思いも新道少年野球団にある。英夫は中学・高校と野球を続け、高校では西東京大会の決勝まで行ったにもかかわらず、その思いは新道少年野球団に及ばないのは、それが新道という土地ではなかったからであろう。新道には新道独特の土地の匂い、土地の情、もっと言えば新道の伝統や文化があった。それが無残にも打ち壊されていく現代の非情さ、それは大和屋の引越しに象徴される新道のもろさでなかったか。正ちゃんはまさに移ろいゆく新道であった。英夫ははじめ新道少年野球団を意識するとしなにかかわらず、そのことを認めるわけにはいかなかったであろう。正ちゃんは新道少年野球団の主将でなくてはならないし、日陰を作ってくれた頼もしい正ちゃんではなくてはならないのである。彼らにとっては新道がどう変わろうと、最も大切に失ってはならないものであっただろう。

「振り返って西を見ると、大会社の大きなビルが野球場に覆いかぶさるように立っていた。この十何年かのうちに、ここには西日が差さなくなってしまうようである。」最後の4行に、作者井上ひさしの新道に対する愛惜の情が客観的に淡々と表現されている。

3 ね ら い

人間には人を人としていとおしむ心があり、その上に立って多くの人と信頼の絆で結ばれている。その固い絆が生きる支えとなっていることを理解し、よりよく生きようとする態度を養う。

<第1時> 変わりゆく新道への愛惜

新道少年野球団に象徴される新道のたくましが失われたことを通して、人間の結び付きの大切さを理解させる。

<第2時> 固い絆で結ばれたナイン（本時）

騙されたにもかかわらず、正太郎を許し感謝さえする英夫を通して、固い絆で結ばれた人間の姿について理解させる。

4 指導過程

(1) 第1時の指導

展開の概要	期待する生徒の反応	指導上の留意点
1 あらすじを確認する。		資料内容の事実過程の確認にとどめる。
2 中村さんが新道少年野球団について持っている思いを話し合う。	A 自分自身の誇りでもある。 B ナインがばらばらになってしまったことが寂しい。 C 頑張り抜いた姿に感動した。生きる喜びを与えてくれた。	A＝誇り B＝愛惜 C＝生きがい 中村さんの新道少年野球団への愛着とその奥に流れるものに気づかせる。
3 新道にとって、新道少年野球団とはどんな存在であったかを考える。	A 新道そのものであり、当時の新道のようなたくましさがあった。 B 新道に暮らす人たちの誇りであった。 C 新道に暮らす人たちの生きる支えのようなものであった。	A＝象徴 B＝誇り C＝生きがい 新道少年野球団は、かつての新道そのものであったことに気づかせる。 (Aへ収束したい)
4 新道少年野球団に象徴される新道の変化の中で失われつつあるものが何であるかを考える。	A 自信がなくなり、外からやってくる人に頼らなければ生きられなくなった。 B とてもにぎやかになり、経済的に豊かになった。 C 人と人とのつながりがうすれてきた。	A＝精神的貧しさ B＝経済的豊かさ C＝連帯 新道の変化の中で、人々との結び付きまでもが失われつつあることに気づかせる。 (Cへ収束したい)
5 「ここには西日が差さなくなってしまうようだ」という作者の中にはどんな思いがこみ上げてきたかを考える。	A 快適に暮らせることが、かえって人間同志の距離を遠ざけているのではないか。 B かつての新道に対するなつかしさと、こんなに変わってしまったという気持ちがこみ上げてきた。	A＝連帯 B＝愛惜 かつての新道の中にあつたよさに気づかせる。

(2) 第2時の指導

展 開 の 大 要	期 待 す る 生 徒 の 反 応	指 導 上 の 留 意 点
1 前時の確認をする。		•新道の変化を中心に前時の確認をする。
2 陰を作り合いながら、試合を乗り越えた時のナインたちの気持ちについて考える。	A 英夫は陰を作ってくれた正太郎やナインたちへの感謝の気持ちでいっぱいだった。 B 支え合う仲間をもてたという誇りがあった。 C 自分たちにはできないことはないんだという気持ち。 D 本当の友だちなんだ。	A＝感謝 B＝誇り C＝連帯 D＝友情 •正太郎を中心として、ナインが結束していったことを理解させる。 (Cへ収束したい)
3 現在の正太郎についてどう思うかを話し合う。	A 信じてくれる仲間を裏切ることとは許せない。 B 家庭の事情が正太郎をゆがめていった。 C 人として絶対許せない行為である。	A＝連帯 B＝寛容 C＝正義感 •正太郎のやったことは、決して許されることではないことを押さえながらAC対Bの対立で話し合わせる。
4 騙されていながら、許すばかりでなく、英夫はなぜ正太郎に感謝するのかを考える。	A 正太郎をいつまでも大切に思っている。 B 正太郎を大事な仲間と思って信じている。 C 正太郎は英夫の心の支えであったから。 D 日陰を作ってくれた正太郎に恩を感じている。	A＝友情 B＝連帯 C＝生きがい D＝感謝 (Cへ収束したい)
5 「その気持ちは今でも心のどこかに残っていると思います。だから……」という英夫にはどんな思いが込められているのかを考える。	A どんなことがあっても正太郎は正太郎なんだ、ナインにとってはみんなかけがえのない仲間なんだ。 B 正太郎を支えとして精一杯生きていきたい。正太郎を否定することは、自分自身の生きる支えを否定することなんだ。 C どんなことでも解決できる。 D ナインの一人である正太郎を信じたい。	A＝連帯 B＝生きがい C＝自信 D＝信頼 •正太郎との絆を信じ、正太郎に応えようとする英夫の思いが、英夫自身の生きる支えとなっていることに気づかせる。
6 前時の学習と重ねて授業のまとめをする。		•生徒の言葉で授業を終える。

(2) 【授業記録】

主 題 生 き る 絆

資料「ナイン」（井上ひさし作）

板野中学校 3 年 B 組 指導者 森 口 健 司

T 1：今日も生きることを求めて、
みんなの思いや願いを語り合いた
いと思います。最初に前の時間話
し合ったことについて、前の時間
の板書を見ながら振り返ってみた
いと思います。

新野（男）：新道という街は、新道少年
野球団があったことで活気づいて
とても温かい街になったと思います。
そしてその中で人々は、新道
少年野球団を新道の象徴として新
道にはなくてはならない存在だと
思っていたと思います。



森川（男）：新道少年野球団は新道の誇りであり、象徴であったと思います。新道は変わってしまったけれど、ナインのみんなには、変わってほしくないという思いが中村さんにはあって、昔の新道のような家族のつながりがいつまでもあってほしいんだろうと思いました。

川田（女）：新道少年野球団は、新道にとってすごく大きな存在であったと思います。中村さんにとっても昔の思い出を語れる最高のチームだったと思います。

圓藤（女）：新道少年野球団に象徴されるみたいに、新道は華やかになったけれど、その代わりに人と人とのつながりとか自信とか、そんなのがなくなったというのが 1 時間目の一番大きな印象です。

村山（男）：新道と新道少年野球団はお互いに支え合う関係があって、それで新道は自分の子供たちが少年野球団にいたから、その新道の人たち全体のつながりがあって、いろいろと結び付いていて、その新道について話すにはいつも新道少年野球団のことが出てきたりして、それで今は新道少年野球団の方は何か離れ離れになったけど、新道は何か商店街としてにぎやかになったものの、人と人との係わりとか接触はなくなって、この新道は一つに家族だったけど、その家族的な何かが失われつつあると思います。

久保（男）：新道と新道少年野球団は本当につながっていて、だれからも愛される存在であって、やっぱり何かで結ばれていたと思います。

井上（女）：前の時間勉強して新道と新道少年野球団というのは、同じようなものだったんだと思います。新道の人たちが見せた人間と人間の絆というのがナインの見せた絆であって、新道が変わっていくと共にナインのみんなも変わっていったから、中村さんは昔の新道少年野球団を思い起こ

すことによって、昔のままの人間と人間のつながりのあった新道のままで変わらないでほしいと願ったんだと私は思いました。

T 2 : 中村さんの思いを通して、新道少年野球団や新道商店街について考えてきたわけですけど、この時間は陰をつくり合いながら最後まで決勝戦を戦い抜いた新道少年野球団のナインの気持ちについて話し合いたいと思います。(板書①)

稲井(女) : 英夫が炎天下で12回を完投できたのは、陰をつくってくれた正太郎のおかげだし、その周りで支えてくれたナイン一人ひとりの支えで12回まで完投できたんだと思います。

中山(女) : 陰が一つもないところでの試合は本当につらかったと思います。ナインが陰をつくってくれた時にあまり暑さは変わらなかったかもしれないけれど、この英夫には何十倍も涼しく感じられたと思います。そして、そういうふうに支えられ、励まして励まされてきた仲間とだったから、やっぱり最後まで頑張れたんだと思います。

漆原(男) : もう6回まできたら、もう英夫もかなりバテていたと思うんです。そこへ正太郎の日陰がきて、やっぱりすごく驚いたと思うんです。正太郎自身はそんな友情とか、そんなん関係なくて勝たいたい一心のところにそういう考えができてきたと思うんです。でも他のナインから見たら、正太郎がすごくすばらしい人間に見えて、また自分たちナインの友情もあるんだなあというのを感じたと思います。

T 3 : 正太郎が日陰をつくったということにふれて、今発言がありましたけど、漆原君の発言につながってほしいと思います。

井上(男) : やっぱりみんなの言うようにこんな厳しい中で戦ったんだから、ナインの関係も深まっていったと思います。そして、あのパレードの時に泣いていたのは、やっぱり陰をつくり合うという関係が深まって、悔しさよりもすごい嬉しさがあったと思うし、涙を流したのもその嬉しさがこみ上げてきて、涙が出てきたんだと思います。やっぱり正太郎を中心としてナインが一丸となって戦ったことが、ナインのみんなも英夫もそのことが嬉しかったんだと思います。

松本(男) : ナインはやっぱり陰をつくり合ったりして、心が一つになっていたと思います。心が一つになったから、あとあとで英夫や常雄たちも正太郎が悪いことをしても、警察に訴えることができなかったと思います。正太郎が陰をつくらなかったら、今のナインの関係はなかったと思います。(板書②)

加藤(女) : それぞれ真夏の暑い中、戦っていてしんどいのにな仲間を支えながら試合をしたことはすごく感動したし、もし私がその中の一員であって試合を乗り越えた時の気持ちを考えると、仲間を支え合った満足感でいっぱいだったと思います。

楠本(女) : この試合を乗り越えられたのは、お互いに助け合ってこの試合をみんなで乗り切ろうという気持ちと、みんなで力を合わせて勝ったという気持ちがあったと思います。みんなで団結して試合をしたいという気持ちがあったと思います。

廣瀬(男) : このナインが陰をつくったことによって、ナイン全体が一丸となって本当に良いチームになったと思います。だから心が一つになって戦えたことが嬉しくて泣いたんだと思います。

仲田(男) : ナインは9人で一人というように、みんなが助け合って一人が苦しんだらみんなが苦しむというように、みんな助け合って支え合っていたから、最後まで戦い抜けたと思います。

井上(女) : さっきの漆原君の意見についてだけど、正太郎が陰をつくったのは、自分が勝たいたい一心

だったと言ったけど、私はそうじゃないと思います。やっぱり正太郎は英夫を少しでも楽にしてやりたいと思って、英夫を思う気持ちから陰をつくったと思うんです。私はやっぱり英夫とかナイン全体のことを思ってやった行動だと思います。

中山（女）：私も井上さんと同じ意見で漆原君の意見とはちょっと違うんだけど、やっぱり勝ちたい一心というんじゃないくて、仲間のことを本当に大切に思っていてみんなでいっしょに最後まで頑張りがなかったからで、やっぱり一人しかいない投手の英夫が本当につらい思いをしているので、ちょっとでも力になってあげたくて、勝ちたいとかそういうんじゃないくて、自然とそういうことができたんだと思います。

村山（男）：僕も同じで英夫がピッチャーをやって、正太郎がキャッチャーだったから、英夫も球に球威がなくなれば一番わかるのがキャッチャーだから、正太郎は英夫の疲れぐあいが一番わかり、日陰をつくるという行動をとったんだと思います。そして、ナインも正太郎にひかれて、やっぱり全員で勝ちたいという気持ちがあって、一人が疲れることにより全員が駄目になるんじゃないくて全員が勝ちたかったからこそ、その一人を支えていくことのできる関係がそのナインの中にはあったんだと思います。

藤田（男）：僕は漆原君と同じで、やっぱり正太郎が日陰をつくってあげたのは、僕がもし、正太郎だったとしてもキャプテンとしてというか、捕手としてキャプテンとしてベンチでぐったりしているピッチャーを見たらもう見ていられなくなってしまっって、日陰をつくったり、頭を冷やしてあげるとような最善の努力をしてあげると思います。だから、僕は正太郎は勝ちたい一心で陰をつくったような感じがします。

松本（男）：僕はやっぱり漆原君と藤田君とは違って、勝ちたい一心もあったかもしれないけれど、やっぱり捕手と投手は心が通じ合い、投手のつらい気持ちがものすごくわかり、この試合を精一杯頑張っていきたいと思っていたからだと思います。

中山（女）：藤田君になんだけど、ぐったりしている英夫を見て、何とかしてあげたいとか、そういうふうに思うのはやっぱり、仲間を思う気持ちだと思います。でも、もし勝ちたいんだったら、ぐったりしているのを見て何とかしてあげたいとかいうんじゃないくて、一番始めに、このままだったら勝てんようになるかもしれないというようなことを考えるのに、ぐったりしている英夫を見て、陰をつくって上げたい、何か力になることをして上げたいと思うのは仲間を思う心だと思います。

岡本（男）：正太郎は英夫が疲れているのを見て、勝ち負けは別として、最後まで英夫を始めとするナインと最後まで戦いたいと思ったから、陰をつくったんだと思います。

T 4：共に頑張りがかったということですね。

赤澤（男）：僕も正太郎が英夫に陰をつくったというのは、みんなでこの試合を乗り切っていかなければならないと思ったからだと思います。それだけナインは一つになれたんだと思いました。

T 5：一つにつながったということですね。正太郎を中心にあれだけ頑張った。そういう関係であった。それにもかかわらず、正太郎は驚くほど変わってしまった。今の正太郎について、変わってしまった正太郎について、みんなが思うことを語ってほしいと思います。

村山（男）：かつての正太郎はナインを引っ張っていく統率力があって、リーダー的存在の強い人だったから、ナインがついていって、正太郎にも人を思いやる心があって、ナインにもその正太郎についていきたいという思いがあったと思います。でも、その正太郎が今では、心から信じ合っ

いた仲間から寸借詐欺とか、人を騙す行為とかをしていて、それは絶対に許せん行為だけど、正太郎の家では、家庭の中でお父さんの女出入りとかがあって、しょっちゅうもめていて、喧嘩のあるたびに正太郎は家出をしていたと資料の中にあったけど、そんな家庭だったからこそ、正太郎がそこまで変わったんだと思うし、周りの大人によって子供は大きく左右されるし、影響もされやすいものだとは僕は思いました。



廣瀬（男）：今の正太郎は許せないと思いました。旧友だから騙していいのではなくて、旧友だからこそ、騙してはいけないのだと思いました。陰をつくり合いながら19回を投げきったせっかくの絆を一人のせいで壊してしまっただけだと思いました。

圓藤（女）：村山君は小さい時からの家庭の事情が原因で変わってしまったと言ったけど、昔からそんな複雑な家庭環境におかれても、正太郎はしっかりとキャプテンとして、新道少年野球団を引っ張ってきたんだから、家庭のもめ事は理由の一つではあるけれど、正太郎がこんなに変わった直接の原因にはならないと思います。

T 6：今の意見についてどうですか。

井上（女）：私は村山君の意見と同じで圓藤さんの意見もわかるんだけど、やっぱり子供というのは、周りとかそういうのに流されやすくて、だから正太郎も社会の流れとか、家の中の事情とかに負けてしまったんだと思います。そして、正太郎はずっと耐えていたものがあつたと思うけど、それは新道がかわってしまったとたんに、やっぱり正太郎も心の支えみたいなのがなくなって、今まで親のそういう行動とかも我慢していたけど、やっぱり我慢できないようになったんじゃないかなと私は思います。

T 7：今の発言に答えてどうでしょうか。

井上（男）：どんなに家の事情があつても、やっぱりそこまで信じてくれるナインのみんなを裏切つてまで、そんな悪い行動をするのは、やっぱり正太郎は許せないと思いました。

中山（女）：井上君も言っていたように、今現在の正太郎は悪いと思います。これはもうみんながわかっていることだと思うけど、絶対悪いです。でも、やっぱり周りの人間のマイナスの影響とか、家族のいろんなもめ事があつたりして、新道が変わっていく中でやっぱり正太郎の中でも、何か変わっていくものがあつたんだと思います。

T 8：いろいろと意見が出てきたけど、今の発言に触れてどうですか。

小川（女）：やっぱり人を騙しながら物を盗むことは、どんなことがあつても悪いことだと思います。もしそれで人が亡くなっていたら、大変なことになっていたと思います。だから、絶対に正太郎がしたことは悪いと思います。（板書③）

藤田（男）：あの正太郎が今こんなにおかしくなっているのは、家庭内でいろいろあったためとしたら、それはやっぱりおかしいと思うんです。そのためにナインを裏切るというのは、さっきの日陰をつくったときの気持ちに当てはまると思うんだけど、あの日陰をつくって上げたときにナインのことを心から思っていたら、今は裏切っていないと思います。だから、日陰をつくったときの気持ちもやっぱり、怪しいような感じがします。

松本（男）：僕はこの正太郎は昔は良いことをしたような感じがするけど、やっぱり今は本当に悪いと思います。それから常雄や英夫はこの正太郎を訴えることができなかったと書いてあったけど、僕だったら、正太郎はやっぱり昔心をつにして頑張った仲間だからやっぱり信じているし、訴えようと思って、後でもとにもどってくれると信じて、訴えることができなかったと思います。

T 9：今の松本君の発言につなげて。

村山（男）：訴えるか訴えないかということなんだけど、僕の場合は訴えられないという方の意見です。英夫と常雄は実際に正太郎のことを訴えなかったけど、英夫たちの気持ちの中には、正太郎が騙し取ったものは絶対いつかは返ってくると信じていると思うんです。そんなに信じるのは、少年野球団のときに陰をつくってくれたりして、実際に支えてくれてとても力強い存在だって、とても尊敬していたからだと思うんです。もし、正太郎を訴えたら、自分の尊敬している人を消してしまうことになって、正太郎を支えとして頑張った部分までも消えてなくなってしまうと思ったから訴えられなかったんだと思います。

T10：今の松本君と村山君の発言に係わってくるんですけど、正太郎のしたことは絶対に悪いことであり、人として許せない絶対に悪いことですよね。これはさっき中山さんも言いましたが、にもかかわらず英夫は許すだけでなく、「一人前になれたのは正ちゃんのおかげだ。」と正太郎に85万円という大金を騙し取られておりながら、正太郎に感謝までする。その許すだけでなく、感謝までする英夫について、みんなが思うことを聞かせてください。（板書④）

佐々木（女）：英夫は本当はすごく正太郎のことを憎んでいると思います。けどあの日陰をつくってくれた正太郎の優しさやナインみんなでつくった思い出を、嘘にしたくないという気持ちがあったと思います。

土内（女）：人間のだらしなさやうぬぼれで、自分だけ幸せを求めていくようになった世の中の流れの中で、英夫は85万円騙し取られたことによって、人間として大切な人間の結び付きだけは失いたくないと思ったんだと思います。

小川（女）：西日を遮ってくれた正太郎だし、新道少年野球団での仲間でもあったので、やっぱり全然日陰のないところに日陰をつくってくれたその思いが心に残って、感謝という英夫の思いがどうしても正太郎を訴えることをさせなかったんだと思います。

井上（女）：英夫というのは、昔の人間と人間のつながりがあった新道がすごく好きで、今の新道は変わっているけど、その昔の新道に思いを寄せて今まで頑張ってきたんだと思います。そして、新道と言えばやっぱり新道少年野球団が出てきて、新道少年野球団が出てくるということは、正太郎が陰をつくってくれたということが、やっぱり出てくるんだと思います。だから、そのことを否定することになれば、自分の心の支えをなくすことになるから、そのことはすごくいやだから、もう正太郎がやったことはすごく許せないけど、できるだけ正太郎を美化するとか、何でも悪いことをいいことの方に思うように英夫はしているんだと思います。

T11：（板書⑤）心の支えだったということ。

新野（男）：正太郎が英夫の心の中ではなくてはならない存在になっていて、そして、正太郎を信じないということは、英夫自身を信じないということになると思います。

中山（女）：私は最初憎んでいるのに感謝するという意味がわかりませんでした。さっきも出てきたこ

となんだけど、警察に届けるか届けないかという話なんだけど、きっと私が英夫の立場だったら、警察に届けると思いました。それは、英夫に陰をつくってくれたのは正太郎だったけど、同じ野球をやっていたメンバーも一緒に陰をつくってくれたので、正太郎だけが陰をつくってくれたのではないと思いますながら、正太郎一人よりもたくさんのナインの方を選ぶと思ったからです。そんなことをいろいろ考



えているときに、一人の友達に言われたんだけど、「もし私が部落の人間として、私がこれからのこと、今のこと、いろいろと悩んでいてその苦しみをわかってはしくて、『私は部落の人間です。』って、この3年B組のみんななら打ち明けたら、そのとき3年B組のみんなが温かい眼差しで『何言よん、そんなこと関係ないよ、これからいっしょに学んでいこう。』と言ってくれたとき、それが陰をつくってくれたことになるんと違うん。私はそう思うんよ。」と言ってくれたんです。そのとき私はハッとしたんです。英夫と正太郎の関係は、私たちが同和問題の学習で築き上げてきた関係とよく似ていると思うんです。どんなことがあっても否定できない、どんなことがあっても切れることのない関係というものが、人間には必要なんだと思うんです。私たちは今まで、一生懸命に同和問題の学習に取り組んできました。私の住んでいる板野町には部落と言われて差別されている地域があります。この学習に真剣に取り組み始めたのは、差別を受けて悲しんでいる友の叫びを聞いてからです。今思うといろんなことがあったけど、頑張ってきてよかったと思います。この学習を始めてからナインのような関係ができてきたと思います。一人の子が自分のことを告白する周りのみんなが支える。そして、その子の笑顔がみんなの支えになります。ナインと同じだなと思います。

井上（女）：私も中山さんの言った通りだと思います。このナインの関係というのが私たち今の3年B組の関係であってほしいと私は思いました。これは私もやっぱり、中山さんの言うように、どうして英夫は正太郎のことを許すのかなあと考えていたけど、中山さんと考えていて、やっぱり支えてもらったということはすごく嬉しいことだし、私も2年生からずっと公開授業とか、全体学習とかをやってきて支えてもらったことがたくさんあって、そのときのことが今もしっかりと心に残っているし、英夫というのはやっぱり正太郎が支えてくれたことがすごく嬉しかったんだと思います。

井上（男）：今聞いていて、やっぱりこのナインの資料は何か僕たち3Bにあてはまると思います。こ

これから徳島県も板野町も発展していくと思うし、やっぱり昔の板野がよかったなあと思うことがあります。僕たちは中学生だけど、これから高校へ進学したり、就職してでも、こんなナインのような関係になっていきたいなあと思います。

村山（男）：やっぱりこのナインの資料の中には、同和問題学習で学んできたことを土台として考えた方が何かわかりやすいところがあると思います。国語の学習という意味で考えたら答えを見つけるために決まった答えを探すために、みんな同じような考え方になっていくと思うんです。でも、同和問題の学習では、お決まりの答えを求めるのではなくて、自分の本当に感じたことや、自分の中でこみ上げてきたものを意見として語り合うことによって、どれだけ周りが反応してくれるかということが、大切だと思うんです。本当の思いと思いをぶつけ合うところに同和問題学習の本当の意味や喜びや楽しさがあると思うんです。また、今まで積み上げてきた同和問題学習によってこのナインの関係は3 Bの中にもいっぱいできてきたと思うんです。支え合うということは本当に大切なことだと僕もしみじみ思っています。自分が発表したときに周りが支えてくれて、もっと頑張らないかん、こんな仲間のためにも、もっと頑張らないかんと思ってきたんです。このナインの団結とか、支え合うということを考えていくうちに、やっぱりみんなのことが真っ先に出てきて、それでこんな大きな授業とかをたくさん経験してきたから、ある程度は自分の思うままの意見が言えるようになってきたと思うんです。それでさっき井上君が言ったように、板野町とか徳島県とかもだんだんと変わっていくと思うんです。変わっていくことによって、昔の方がよかったなあという気持ちも残ると思うけど、大きくなってからも周りにこんな仲間がいて、互いに支え合って生きていくことができればいいと思います。これから高校へ行ったり就職したりして、周りの仲間に自分の心を開いて話のできる人がいなかったら差別されるかもしれませんが、今はこの周りに仲間がいるから、どんなことがあっても頑張っていくことができます。実際、将来負けそうになったときも、今のこの仲間に相談できるような関係をつくっていききたいと思います。

松本（男）：このナインとこのクラスはほとんど一緒だと思います。ナインも助け合ったり、支え合ったり、協力し合って何か一つのことを頑張っているし、僕らのクラスもやっぱり一人ひとりが、一人がみんなをみんなが一人を支え合い励まし合って、同和問題学習に頑張っているから似ていると思います。それから、今この学習を頑張っていて、やっぱりさっきも言ったんだけど、もう少ししたら中学も卒業で就職や進学をするし、やっぱり就職や進学したら、目に見える差別に出会うことも出てくると思うんです。だから、今のこの関係やこの思いとかを忘れないで頑張っていかなければいけないと思います。

圓藤（女）：私もみんなが言うようにナインとこのクラス3 Bはよく似ているなあと思いました。それで先生が道德教育と同和教育は違うって言いましたよね。確か、この大会で部落問題ずばりの資料はできんと言いましたよね。でも、私はこの資料「ナイン」の学習で、ナインは私たちのクラスに似ているなあというところが出てきたけど、私たちのクラスの今の関係はこれまでの同和問題の学習によって成り立っているんだから、道德教育と同和教育は全く一緒でないかもしれないけど、結局はつながっているんだと思います。

井上（女）：圓藤さんの意見が出たんだけど、私たちがこの富田中学校にきて授業すると聞いたとき、私たち3年B組は同和問題の学習をするもんだと思っていたのに、こういう直接同和問題に触れ

ない資料をするということで、ちょっとやりにくいなあと思っていたけど、結局、同和問題の学習も道徳の学習も一緒に人間の生き方につながっているものだから、みんないろいろな意見が出たと思うんです。結局、人間というものは支え合ったりして、生きていかなあかんもんやし、だから、私は社会の流れとかに流されんようにして今までのみんなとの関係を大切に守りたいんです。私にたくさんの子が、自分の一番つらかった部分だった部落に生まれたということを言ってくれたけど、私は絶対にその子たちを裏切ることがないように、その子や西日に照らされて苦しむようなことがあったら、さっと日陰をつくれるような人に私はなりたいなあと思います。

中山（女）：私も圓藤さんと井上さんの意見に付け足すんだけど、やっぱり始めにナインの資料をもらったときに思ったことは、何か難しいということが一番最初に思って、2回目、3回目と読んでいくうちに、段々いろんな考えが生まれてきたし、クラスでも意見の違う人がたくさんいて、話し合いも盛り上がっているんだけど、どうしても私は考えが変えれんというか、こだわっていたところがあるんだけど、今までの同和問題学習で築き上げてきたクラスの信頼関係と平行して考えていくと、ナインの奥に流れているものがよくわかってきたんです。やっぱり、この資料「ナイン」だけで考えていったら、今のような発表とか、私の発表とかはなかったと思います。そして、みんなが心を一つにして、板野中学校全員で同和問題について学んできたから、いろんなことが考えられて、こうやって発表ができるんだと思います。

楠本（女）：このナインとこのクラスの関係は似ているところがあると思います。私も前にみんなを信頼して自分の一番つらい部分を打ち明けたんだけど、周りの子が支えてくれたときは嬉しかったんです。はじめは言おうかどうか迷ったけど、みんなが支えてくれたので言ってよかったと思います。

大森（女）：3年B組とナインはもうそのまま同じだと思います。自分のことを告白して、その子がそのままではなく、みんなが支えてその子の陰になっているから、このクラス全員がみんな一人ひとりの陰に入っているんだと思います。

廣瀬（男）：このナインと3年B組はやっぱり同じだと思います。この「ナイン」の資料と部落問題学習の資料も根本は同じではないかと思いました。そして、高校に行って困難にぶつかることがあっても、僕は今まで僕を支えてくれた人とか、3年B組のみんなのことを思い出して、自分で自分自身を励ましながら頑張っていくと思います。

T12：英夫の気持ちや英夫の婆に我々3年B組というつながりを重ねて、みんないろいろな思いを語ってくれた。英夫の思いを今一度かみしめてみたい。最後のところで英夫が「自分たちは日陰なぞありえないところにちゃんと日陰をつくった。このナインにはできないことはないんだ。そんな気持ちでいっぱいでした。その気持ちは今でもどこかに残っていると思います。だから……」。

（板書⑥）この「だから……」の後に飲み込んだ言いたかった思い、この英夫の思いに寄せてみんなの思いを語り合ってほしいと思います。

漆原（男）：やっぱり英夫は今も、ナインのみんなの心は一つになっていることを望んでいるんだと思います。

村山（男）：このナインにはできないことはないんだという強い気持ちがあったんだと思います。それでも僕もこの富田中学校へ来る授業の前に、このクラスのみんなにはできないことはないんだと思って、みんなを信じて授業に来て、実際にこの授業をしたら、やっぱりすごいなあって思いま

した。それで英夫の思いはやっぱり、このナインの関係を絶対になくしていきたくないという気持ちと、ナインを信じていた自分の気持ちを常雄や正太郎や他のナインも同じように思っていると思って、頑張り続けるもとなっていたんだと思います。

永峰（女）：新道少年野球団のキャプテンとして、活躍してきた正太郎が、他のナインたちの気持ちを打ち破り、常雄や英夫たちを傷つけたけど、今でも優しい気持ちは正太郎の心の中にあると思うから英夫たちは憎めなかったと思います。

土内（女）：陰をつくった正太郎が英夫の苦しみを自分の苦しみとして背負ったように、ナインだから、ナインとしての掛け替えのない仲間だから、その心はまだ、正太郎の心の中に残っているという思いを込めていると思います。

太田（女）：ナインみんなが集まれば陰のないところにも陰をつくれる。そして、できないことはないんだという気持ちが今の正太郎に少しでも残っていたら、自分のやっていることがみんなに迷惑をかけていることにも気付いてくれるという自信と信頼が英夫にあったと思います。

T13：自信と信頼ということですね。

斎藤（女）：私が3年B組のみんなを大切に思っているように、英夫も正太郎のことを大切な人と思っていると思います。

松本（男）：僕はここでは正太郎を信じているか、いないかだと思います。正太郎を信じていたから、さっきから僕が何回も言ったことだけど、英夫は正太郎を警察に訴えることができなかったし、英夫に感謝までするという思いがでてくるんだと思います。

井上（女）：英夫というのは、自分には正太郎を信じるしかないんだと思っていたと思います。だから、正太郎が心を入れ替えて帰るまで、その正太郎がつくった穴を埋めることしか自分にはできないんだと思ったんだと思います。そして、やっぱり自分たちナインには何もできないことはないと思っていたから、変わっていった新道を自分たちなら昔の温かい関係の元の新道に変えられと思ったんだと思います。もし、新道の街自体が大きく変わってしまっても、昔の人間と人間との絆があった新道のよさをもって、自分たちは頑張っていくことができるという自信があったんだと思います。そして、今私は英夫みたいに、絶対に切れることのない、みんなとの絆を大切にしたいし、自分たちには何もできないことはないと思っているから、たくさんの人が板野という町をどう思っているかは知らないけれど、私は3年B組のみんなとなら絶対に、板野町に対する偏見の目とかを変えていけると私は今、自信を持っています。

中山（女）：私も井上さんと同じような意見なんだけど、この3年B組のクラスの中に私がいてよかったと思います。みんなの前だったらいろんなことを発表できるし、そして、もし友達とかがその友達のつらいことを告白してくれたときでも、このクラスのみんなだったら一人にしないで、すぐに手を挙げて支えてくれるし、そんな仲間とならどんなことでもできると思います。そして、私もみんなとともにこの板野町をどんなふうに考えている人がいるかわからないけど、そんな偏見の目を一生懸命頑張って変えていきたいと思います。

松本（男）：このクラスは僕の一番言いたいことがはっきり言えたクラスであり、やっぱり心が通じ合ったクラスであるから、この思いを忘れないで将来この思いを生かして、差別とかにも対抗して頑張っていきたいと思います。

T14：みんなの思いがいっぱいつまった授業になってきた。そのことが嬉しい。そして、本当に時間が

わずかになってきたんですけど、前の時間の話し合い。また、この時間の話し合い。いっぱい言いたいことがあるだろうけど、あとわずかな時間をもらってみんなの中にある思いを最後に出し合って、この時間を閉じたいと思います。

村山（男）：この「ナイン」の学習ももことになるものは同和問題学習だと思います。この資料も国語として考えれば難しいことがいっぱいあって、あまり考えが出てこなかったと思うけど、今まで取り組んできた同和問題学習を土台として考えてみたら、どんどん考えが深まってくるし、出てきた意見についても自分でもっともっと考えていかなければという思いがあって、実際に考えられるようになったのは、同和問題の学習があったからだと思うんです。前の時間に道德の学習と同和問題の学習は違うという話があったけど、やっぱり道德の学習をしていく上でも、今までの同和問題学習の積み上げがあったから考えることができたし、僕たちは同和問題学習の方を先に重点的に勉強していたから、ここまで意見が言えるようになって、この「ナイン」の資料とかもより深く考えられるようになったから、同和問題の学習は人間の生き方を考えていく基本として、とても大切なものだと思います。また、ここまで周りのみんなを信頼できるようになってきて、支え合う仲間ができてみんなとの絆がどんどん深まってきたのは、やっぱり同和問題学習があったからだと思うんです。僕には同和問題学習を通してできた仲間がいたから、今の自分があるんであって、仲間がいなくて支えがなかったら今の自分はなかったと思います。

井上（男）：今日の授業はみんなに熱いものがこみ上げてきたと思います。こんなに発表するんだから、みんな一生懸命になっているんだと思います。そして、前を見てみると「人間としての生き方を考える道德教育」と書いてあるけど、やっぱり村山君の言うように人間としての生き方を考えていく上では、同和問題学習も道德の学習も変わらないんだと思います。

圓藤（女）：この「ナイン」の資料を最初に読んだときは、まさかこの「ナイン」が同和問題学習と重なっているとは思わなかったけど、いざそうなって考えてみたらそうだなあと納得できて、今この場に自分が居たことをとてもうれしく思います。それで、このみんなとずっとこれからも頑張っていきたいし、ナインは正太郎のせいで崩れていくような感じになったけど、私たちは絶対正太郎みたいな人を出さずにそのままずっと崩れないでいきたいです。

土内（女）：今日は私の友達が初めて手を挙げてくれてすごく嬉しかったです。友達も嬉しかったと思うけど、その嬉しさが自分のことのように思えてきて、何か本当に嬉しかったです。それと、今日手を挙げられなかった人も、自分ではできないと信じないで、自分ではできるんだと信じたら絶対できると思うから頑張ってください。

T15：ありがとう。時間がきてしまいました。

生徒：時間延長できんですか。ほなって手を挙げとる子、ようけおるし……。

T16：時間もらいます。

姫田（男）：今日僕は一回も発表してないけど、さっきからずっと考えていたんだけど、「ナイン」を最初、授業する前は同和問題学習とは全然関係ないと思っていたけど、「ナイン」を勉強していきうちにやっぱり同和問題学習と結び付きがあるんだと思いました。だからこそ何かこんなに熱いものがこみ上げてくるんだと思いました。

川田（女）：みんな信頼とかいっぱい言ってくれたけど、私はこの前ちょっと発表できなかったりして、みんなを裏切ろうとしていました。そのことを先生に言ったら、それは今まで信頼してくれた友

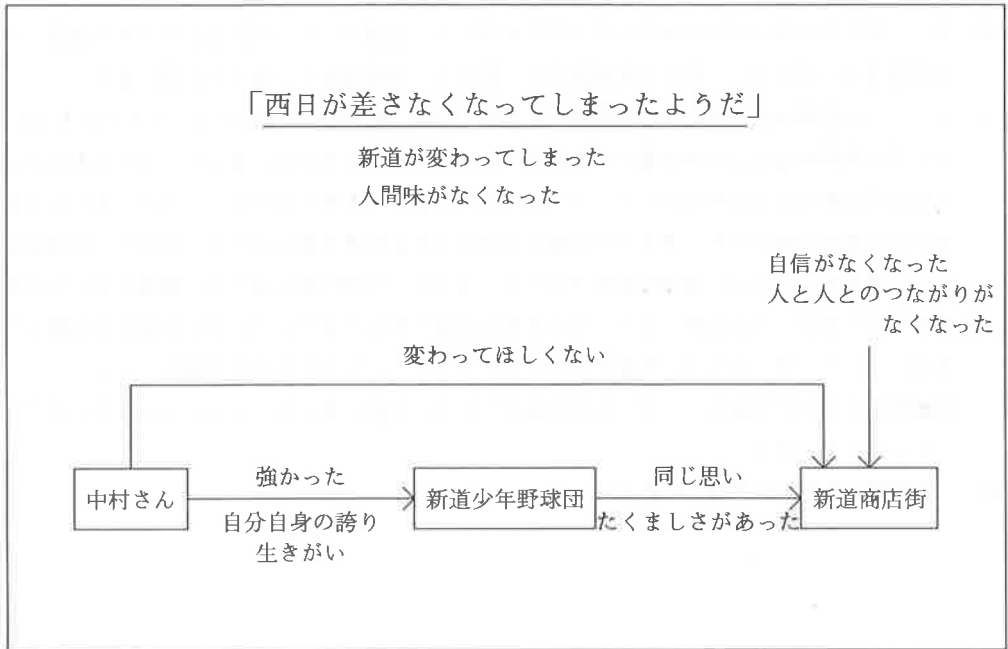
達を殺すことになってしまうとと言われてすごくそれから悩みました。だけどそんな私でも、みんながいてくれたから、これからまた燃えられるようになるかなと思いました。

中山（女）：私たちもやっぱり川田さんのような人がいて、友達がいて、川田さんのように発表してくれる友達がいるから、これからも頑張ろうと思うし、今頑張れているんだと思います。

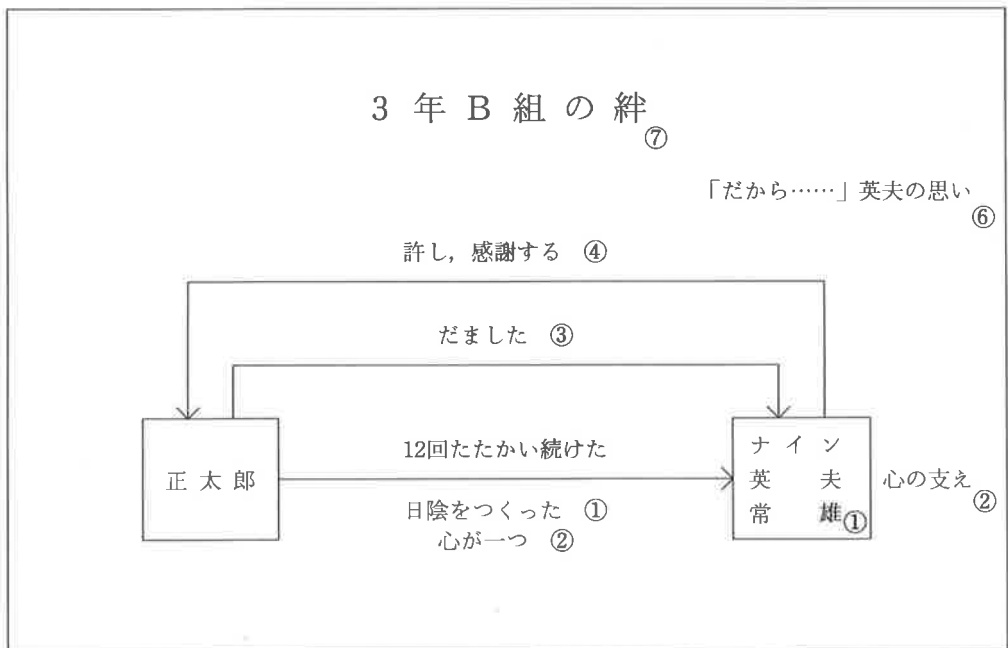
井上（女）：この資料を読んでやっぱり最初に思ったことは、経済的には豊かになってきた日本だけど、どんどん人間の心というのは貧しくなりつつあるん違うかなあとと思いました。この正太郎のように社会の流れに流されて変わっていく人ってたくさんいると思うんです。だけど、私たち3年B組だけは絶対に変わらないままで今の絆を大切にしたいなあとと思いました。それでこの勉強をしていて英夫という人は、同和問題を考えていく上でも、人間の悲しみとか、部落差別とかの悲しみがすごくわかる人だと思います。だからだから私達も英夫のようにずっと仲間を信頼して生きたいし、そして、今の3年B組のみんなだけでなく、たくさんの人と陰をつくり合って、この絶対おかしい差別をなくしていかなければならないと思いました。それに今日みんなすごく輝いていたと思います。

T17：（板書⑦「3年B組の絆」）終わります。

第1時の板書



第2時の板書（本時）



(3) 第25回全日本中学校道德教育研究大会徳島大会

特別公開授業「ナイン」の学習を終えて

みんなに心からお礼が言いたい

3年B組 圓藤 志乃

1991年（平成3年）10月31日木曜日、今日のこの日は忘れることができないだろう。「こんな授業、二度とできないかもしれない」と思っていた板野郡同和教育研究大会の授業さえ影が薄くなってしまう程の授業だった。昨日のこのノートには「緊張もプレッシャーもない」と書いたけれど、さすがに体育館に入った時は少しビビって、それでも隣の岡本君としゃべったり、緊張のせいか顔がこわばっていた廣瀬君をひやかしたりしていたら、いつもみたいな気分になってきて安心した。おまけに授業が始まった時にはやる気がすごい出てきて、何かわくわくしてきたくらいだった。そんな中で始まった授業、私は「今日こそ発言のスタートを切ってやる」と意気込んで挙手しようとしたら、ほとんどの子が挙手していて驚いた。いつもは発表なんてあまりしない子も挙げていて、「負けられない」という気持ちになった。でも、実のところなんか意見がありふれている感じで「こんなんで大丈夫かな」と思っていた。それがこんな授業になった。そのことが嬉しい。この授業に火をつけたのは、やっぱり同和問題学習のことを出した中山さんだと思う。3年生になってからは2週間に一度くらいのペースで公開授業があって、嫌々受けた授業も何度かあった。でも、今日は同和問題を学習したからこそ成り立ったんだと思う。やっぱり学習してきてよかった。これで私なりに道德＝同和問題学習ということが証明できた。10分ぐらいのオーバーで授業が終わった。もっともっと時間がほしかった。最後の礼が終わった時に周りから拍手が聞こえて、一回やんでいたのに退場の時また拍手してくれた。その拍手は私たちが体育館を出るまで続いた。とてもすっきりした清々しい気分になって、つつい顔がほころんでしまった。「ナイン」について言いたいことは全部言ったと感じだった。板野郡同和教育研究大会の授業の終わったときの女子の何人かは涙を流していた。今日の授業には涙はなかった。みんなにこにこしていた。井上さんが言っていたように本当に輝いていた。今日の私たちは準優勝どころか、優勝、ついでに全員にMVPでも贈りたい。それも互いの絆を確かめながらの優勝、要するに最高の試合ができたということで胸いっぱいだ。この授業を3年B組のメンバーで受けられたことをとても嬉しく思うし誇りに思う。みんなに心からお礼が言いたい。徳島県中学校同和教育研究大会は「3年B組の授業」を期待してたくさんの人がくるだろうけど、今日のような授業がしたい。そして、一生3年B組の絆を大切にしていきたい。先生もお疲れさまでした。そしてありがとうございました。

最高の思い出となり、宝物となるような授業

3年B組 井上 由加

富田中学校での全国大会はとてもすごいものになったと思います。富田中学校に行くまではあまり緊張せずに楽しく行けたし、富田中学校についてからもあまり緊張しなかったの、自分自身でも私はなかなか度胸があるなと思っていましたが、体育館に入ってから授業開始まであと5分ぐらいになったところから胸がドキドキし始めました。「どうしよう、どうしよう」と思ったけど、私がここで頑張らなければ応援してくれた板野のみんなに悪いと思って、自分自身に「頑張れ」と言い聞かせました。

授業が始まり最初に先生がみんなに問いかけた瞬間、「あっ！これはいける」と思いました。たくさ

んの子が手を挙げていたからです。そんな状態がずっと続きました。今まで発表したことの無い子までが手を挙げていました。自分の気持ちがどんどん高ぶってくるのがわかりました。中山さんが部落問題のことを出したとき、「ここで中山さんを支えな」と思って手を挙げました。頭の中が真っ白になり周りの先生方の視線がすごく痛く感じました。だけどここで訴えなければ板野のみんなを裏切ることになる。みんなの分も私が訴えなければと思いました。すると自然に言葉が出てきて、何度も何度も手を挙げるエネルギーが沸き起こってきました。どんどん時間が過ぎていくのが悔しくてたまりませんでした。周りは静かで時間は止まったみたいなのに、時計は動いていく、時間が止まってくればと思いました。

時間がきて先生が授業を終えようとしたとき、手を挙げていのに発表できなかった子がもったいなくて、思わず先生に時間を伸ばすように頼んでしまいました。みんなに峠を越えてほしかった。だけどみんなが発言するということは無理だったけど、授業が終わったときの先生方の拍手が私たちが峠を越えたことの証だったような気がします。また退場するときにもらった拍手もとても心に残っています。私にとって最高の思い出となり、宝物となるような授業でした。

板野町に思いを込めて、この絆を大切に持ち続けていきたい

3年B組 井上 浩司

全国大会（富田中学校）に行く前に他のクラスの数人に頑張れということを言われました。その言葉がとても嬉しかったです。自分で言うのも何だけど、その期待通りに僕は発表できたと思います。

富田中学校に着いた時はものすごいプレッシャーを感じたけど、今までの取り組んだ公開授業や全体授業のことを思うと、授業中はほとんど緊張しませんでした。授業が終わったとき、多くの先生から拍手をもらいました。あの拍手は決して忘れることはないと思います。胸の中がすっとして、晴れ晴れとした気持ちになりました。

授業内容もすばらしかったと思います。みんなが頑張ったことが嬉しくなりました。でも、発表できなかった友だちのことを思うと残念です。時間に制限があることがとてもくやし感じられました。

正太郎を中心に英夫に陰を作り合うことが3年B組にもできそうに思うし、できているのかもしれないと思います。中村さんが願ったように僕もこの板野町に思いを込めて、3年B組のナインが高校に行こうがどこに行っても、この絆を大切に持ち続けていきたいと思います。



二度とももらえないような大拍手、いつまでも忘れることはない

3年B組 漆原 健二

今日の授業はいつもの公開授業より気楽にできました。特に体育館が広がったので大きな気持ちで授業ができました。堂々と手を挙げあの大勢の中で発表した時の壮快さ、一生忘れない思い出になると思

います。またこの3年B組の仲間とこんな大きな舞台を経験できたことが本当に嬉しいです。それにいつもあまり発表しない子も、最初からどんどん発言していったのには驚きました。みんな友だちのために頑張ろうとしていることがすごく感じられ、僕も負けないぞという思いで精一杯の気持ちをぶつけることができたと思います。

本当にみんなよく頑張り、3年B組の絆のすばらしさを全国の先生方に訴えることができた最高の授業だったと思います。終わった時の拍手、僕たちが退場する時にくれた拍手、本当に嬉しかったです。あの拍手は僕たちのこれからの人生の大きな支えとなっていくと思います。あの拍手によって僕たちは頑張れたんだという思いと、最高の授業ができたんだという自覚を持つことができました。もう二度ともらえないような大拍手、いつまでも忘れることはないと思います。

僕たちがしてきたことに誇りと自信があった

3年B組 久保耕一郎

全国大会（富田中学校）での授業、今まで以上にいい授業ができたと思います。言いたいことがいっぱいあったけど、最後の方は周りの先生に訴える感じでバンバン意見が出て最高の授業だったと思います。始まってすぐは緊張もしたけど発表してからは楽になりました。知らない人がほとんどだと言ってもあの大勢の中では緊張するものです。そんな緊張間のある中でも訴えていくことができたのは、周りの仲間の励ましがあったのと、今まで僕たちがしてきたことに誇りと自信があったからだと思います。みんなもきっとそんな思いで頑張ったと思います。この3年B組は本当に強いと思います。ナインと照らし合わせて、僕はこの3年B組にはできないことはないんだと思いました。

みんな大きなものを手に入れた

3年B組 新野 恭啓

全国大会の授業本当にすごかった。たくさんの人が発表できたし、みんなとても集中していたと思います。僕は授業中とてもリラックスしていました。手を挙げるのもずっと挙がりました。そして発表もできました。とても楽しいような感じでした。みんなの発表を聞いていると嬉しくなってきました。みんな一つになって頑張っているんだなあと思いました。一つ残念なことは時間がなくなってきて手を挙げたのに発表できなかった人がいたことです。せっかく勇気を振り絞って手を挙げたのに、発表しただろうにと思いました。でもみんな本当によくやったと思います。僕は授業中何度も、今までみんなと頑張ってきてよかったなあという気持ちになり、僕たちにはできないことはないという自信が沸き起こってきました。全国大会の授業で、みんな大きな大きなものを手に入れたと思います。

全国大会の日を思い出して頑張りたい

3年B組 仲田 宏二

全国大会の前日は緊張しなかったけど、当日はものすごく緊張しました。昼ごはんは少し足りないような気がしたけど、すごく緊張して胸がいっぱいでした。授業の時間がきて体育館に入るとき、周りを見るとたくさんの人がいたのでびっくりしました。たくさん先生方が授業を見ると聞いていたけど、まさかこれほどたくさんの人が集まっているとは思っていませんでした。

僕は一回しか手を挙げるができませんでした。指名されて発表した時も自分で何を言っているの

かはっきりとはわかりませんでした。発表した後もしばらく心臓がどきどきしました。始めは資料「ナイン」中心に話し合いが進んでいたけど、だんだん変わっていき同和問題の話になっていきました。みんなが一生懸命に自分自身のことと重ねて資料を考えたから、同和問題にまで発展したんだと思います。みんな中学生とは思えないほどすごかったです。僕も何か言わなければと思ったけど、みんなの意見を聞いていたら胸がいっぱいになってきました。

僕はこの全国大会の授業をみんなと経験できたことを一生の思い出にしたいです。もし大人になってくじけそうになったら、全国大会の日、富田中学校体育館での授業を思い出して頑張りたいです。

授業が終わったときのみんなの笑顔を忘れない

3年B組 姫田 亮

まだ授業の興奮は続いている。全国大会の授業のことが脳裏に焼き付いている。僕たちが本格的に同和問題の学習に取り組みだしたのは、2年の1学期途中だった。もう1年と6か月ぐらいが過ぎている。当時を思い出せばなかなか発表できず、うわべだけの言葉ばかりだった。しかし、学習を続けていく中で何かが変わっていった。しだいに自分の意思で発表する人が増え、森口先生を中心として大きな輪となって3年生を迎えた。本当に3年生の仲間はすごいと思いだした。

この学習に全く無関心だった僕も次第にこの学習を自分自身の問題として考えていくようになった。

僕は今まで頑張ってきた自分に自信を持って全国大会の日を迎えた。授業の始まる前、僕は二つのことを思っていた。一つは「僕たちの学習は決してうわべだけのことを言っていない。みんなの本当の思いをぶつけあった学習を積み上げてきたんだ。」ということだった。もう一つは「この僕たちの学習を真剣に共に同和問題を解決していくんだという、はっきりした人間としての願いをもって見てほしい。」ということだった。12時50分、僕たちの授業は始まった。みんなの発言に胸がいっぱいになった。本当にすごい仲間と授業ができたことが嬉しくてしかたがなかった。授業が終わったとき、みんなの顔には笑みがこぼれた。僕はあのさわやかな笑顔を忘れない。

みんなへの感謝の気持ちで授業を終えることができた

3年B組 村山 匡輝

全国大会の授業を終えて、まだまだ熱いものがこみ上げてくる。やっぱり今まで以上の授業ができたと思う。授業が終わった時こんなすばらしい仲間が僕にはいるんだという気持ちでいっぱいになり、みんなに対する感謝の気持ちでいっぱいだった。全国大会の授業はまさしく周りのみんなに支えられた授業だった。

今までの公開授業で緊張したりして発表できなかった人も、全国大会の授業では発表してくれた。その姿を見て僕は勇気づけられて、もっと発表しようという気になって授業を頑張ることができた。

富田中学校へ行く前に他のクラスの友だちや先生方から、「頑張って授業、成功させてこいよ」と励まし言葉をいっぱいもらった。学年全体で同和問題の学習に取り組んできたことによって、他のクラスの友だちの思いを全国の先生方の前で語ってくるんだという気持ちになった。それと同時に責任感からくる緊張感とプレッシャーで苦しくもなった。授業中幾度となく、励ましの言葉をくれた友だちの顔が浮かんできた。

授業は成功だったと思う。2年生から積み上げてきた全体学習によって僕たちは本当にたくましくも

なり、思いも深くなってきたんだと思った。3年B組全体にとっても、生涯忘れることのない思い出の授業となったと思う。そして何より僕を支えてくれた3Bのみんなや、励ましの言葉をいっぱいくれた他のクラスの友だちへの感謝の気持ちで、授業を終えることができたのが一番うれしかった。

本当のみんなが見えてきた

3年B組 稲井 美音

全国大会は私にとってすごく大きなものだったし、みんなにとっても大きかったと思います。この全国大会で一番心に残ったのは、みんなが一生懸命にこの授業に取り組んだことです。授業が始まるとすぐにたくさんの手が次々と挙がっていました。それを見て何だかみんなが自分を励ましているような気がしました。そんなみんなの励ましによって私も手を挙げることができました。

みんなの意見で一番多かったし、私もそう思ったところは「このナインと3年B組は同じだ」という意見のところでした。今まで同和問題学習に取り組んできて、本当のみんなが見えてきたような気がするし、お互いが信頼し合えるようになったと思います。たぶんみんなもそう思っているとおもうけど、やっぱり人間というのは支え合って生きていくものだと思います。人間が一人では生きていけないのは、誰かの支えがないからです。全国大会の授業を通してそう思いました。一人が発表したら、みんな次々その子の意見に対して応えていくからです。やっぱりB組はいいなあと思いました。私は一回しか発表できなかったけど、これからもどんどんこの学習をしていきたくし、頑張っていきたいです。

私は昔の正太郎のように生きていきたい

3年B組 太田 美紀

全国大会の授業、自分の本当の思いがはっきりと言えてすごい授業になったと思います。私も自分自身が変わったと思います。いつまでも弱気でうじうじしているだけでは、誰も支えることができないし、自分自身人間らしく生きていくことはできないと思います。私はこの授業が終わった時から、私は昔の正太郎のように生きていきたいと思いました。友だちに陰をつくったり陰をつくられたりして、本当の意味で支え合えるような友だちと、ナインのような団結をつくりたいです。

全国大会の授業は、本当に私自身を変えてくれたし、クラス全員一人一人の思いが聞けてとても貴重な一日だったと思います。

10月31日という日が忘れられない日になった

3年B組 加藤 千種

授業があっという間に過ぎたという気がします。私はたった一回の発表だったけど、発表した後はものすごく気持ちがよかったです。もう2～3回発表したかったと思いました。最初の発問からみんなボンボン手を挙げていてさすがB組だなと思いました。

一生に一回の貴重な体験をしたことが本当に嬉しいです。あの授業がどれだけ周りの人に印象を与えたかはわからないけど、きっととてもいい印象を与えただろうと思います。

授業でほとんどの人が発表しました。あの授業で発表しないことには、先へは進まないということがわかったような気がします。富田中学校にいく前、友だちから「頑張りよ」と声をかけられ頑張ろうという気になり、さあこれから始まるという心構えというものができ、自分自身も頑張りました。友だち

を裏切るようなことはしないと生活ノートに決心したことができて、本当によかったと思いました。3年B組の絆がより一層深まったような気がします。心が一つになれた授業だったと思います。3年B組になれたことが本当によかったと思ったし、10月31日という日が忘れられない日になりました。中学時代のよい思い出になりました。

いくつになってもこの授業のように自信をもって生きたい

3年B組 土内 恵子

この授業によって力がついた人もたくさんいたと思う。あの日に起こったすべてが美しく思う。輝く瞳は堂々と前向きの姿勢を忘れなかった。たった一言でも自主的に手を挙げて発言したら、力はそれをつく。授業を終えて思ったことは3Bは無敵だということだった。やればできるんだ。みんなすごい力を持っている。あの感動の日を忘れないだろう。いくつになってもこの授業のように自信をもって生きたい。

井上さんと手をつなぎながら歩いた

3年B組 中山 幸子

全国大会の授業はものすごく感動した。自分で言うのはおかしいけれど、3年B組はすごい。改めて3年B組の一人でよかったと思う。私は始め緊張してとても不安だった。でも一回発表したらすごく楽になれた。同和問題についての発言はどうしようか迷った。でも、今の私たちがあるのは同和問題の学習があったから、今の私たちの関係ができ、こんなに発言ができるようになったこのことを思うと、同和問題学習のことを語ることなしに私たちの心を込めた本当の授業にはならないんだという思いがあった。ただこのことを発表してみんなが応えてくれなかったらどうしようとも思った。思い切って発表してみると、みんなが私の思いに答え支えてくれた。ものすごくうれしかった。

授業が終わったとき拍手をくれた。びっくりした。その拍手が終わって退場したときまた拍手をくれた。井上さんと手をつなぎながら歩いた。ものすごくうれしくて涙が出そうになった。

(4) 【資料】

ナ イ ソ

井 上 ひさし

放送局での仕事が思いがけず早く終わったので、四ッ谷駅前^{よつや}の新道^{しんみち}にある中村さんの店に寄ってみた。中村さんは畳屋^{たたや}の主人である。店は小さいが裏手に大きな仕事場を持っている。東京で五輪大会が開かれた年の暮れから3年間、わたしはその仕事場の2階を借りていた。8畳の台所付き食堂に6畳が二間と4畳半、そのうえ広い風呂場と風通しのいいベランダまであって、家賃は月4万5千円だった。当時の相場の2割方は安かったと思うが、それはとにかくそれほどの間取りを上に乗せることができるぐらい中村畳店^{たたや}の仕事場は大きいのである。その2階にいまは長男^{ひでお}の英夫くん夫婦が住んでいる。

中村さんはスポーツ紙を眺めながら、茶筒に入れた煎餅^{せんべい}をかじっていたが、わたしを見ると、

「ここへ来て、おやつをつき合ってやってくださいよ。」

と、針だこでたらこみたいに脹れ上がった指で火鉢の横の畳を軽く打った。スポーツ紙の見出しに誘われて話題は自然に野球のことになったが、そのうちに中村さんは急に膝^{ひざ}を進めてきて、

「新道少年野球団は強かったねえ。」

ライオンズもジャイアンツも問題じゃないとでもいうような、力が入った口調で言った。

「なにしろ新宿区の少年野球大会で準優勝したぐらいだからなみの強さじゃなかったな。それも決勝戦を延長12回までたたかったうえの準優勝だ。つまり新道少年野球団は優勝したも同じさ。だいたいが優勝チームには投手が3人もいたんだからずるいや。ひきかえ新道には英夫が一人しかいなかった。しかも午前中の準決勝と合わせてぶっ続けで19回も投げ通したんだよ。それも真夏のかんかん照りのもとの19回だ。英夫も、新道少年野球団も、ほんとうによくやった。」

「覚えていますよ、あのときのことは。こちらの仕事場の2階を借りて2度目の夏のことですから。」

「すると、あなたも外濠公園^{とばり}野球場へ詰めかけてきなさっていた口か。」

「いや、夕方、放送局から戻ってくると、ちょうどパレードにぶつかったんです。」

」大学の学生が増え、近くに大会社のビルがいくつも建ったせいで、道幅4メートル、長さ100メートル足らずのこの新道は四谷^{よつや}で一番にぎやかな場所になった。もっとも軒を並べる店は飲み屋に食べ物屋に喫茶店のどれかに限られてしまい、客を迎えるだけの、厚化粧だが、なんだか素っ気のない小路に化けてしまったこともたしかだ。17、8年前と同じ店構えでがんばっているのは、新道入口のワイシャツ店と、小路の奥のこの畳店ぐらいのものである。当時の新道には生活があった。豆腐屋があり、ガラス店が、お惣菜屋^{そうさい}が、ビリヤード屋が、そして主人が会社勤めの普通^{ふつう}の家があった。四ッ谷駅のほうから新道を抜けようとする人は、ゆるやかな勾配^{こうはい}の坂を登ることになるが、その坂の真ん中のあたりには歌舞伎役者の大和屋^{やまとや}（十世岩井半四郎）の住まいもあって、夏の宵などには、白木づくりの玄関の前の、

狭いがよく打ち水した石畳の上で、大和屋が中学生のお嬢さん2人とよく線香花火をしていた。2人のお嬢さんはやがてよく知られた女優になるのだが、ひとことで言えば、そのころの新道は自足していたのである。たいていの日用品は新道のなかにある店屋で十分に間に合っており、それらの店屋はまた新道に住む人たちだけを相手にして、とにかく暮らしが立っていた。新道は、ささやかにではあるが、しっかりと自給自足しており、そこで小路全体に自信のようなものがみなぎっていた。いまはたしかに華やかな小路になっているけれど、外からやってくる客の懐中^{ふところ}をあてにしないとやってゆけないというところが見えて、なんだかもろい通りになったような気がしてしかたがない。

「主将の洗濯屋の正太郎くんが、小さな、準優勝のカップを抱いて大和屋の前を通るところで、わたしはパレードに間に合ったのです。正太郎くんの横には英夫くんがいた。その後ろで7人が団子みたいにかたまって、くすくすんやっていた。ビリヤード屋のおじさんが監督をしていると聞いていたのに、その姿がなかった。あれ、おかしいなと思った記憶があります。」

「ビリヤード屋の大将は決勝戦が始まるとすぐ暑気^{あせ}中りを起こしてひっくり返ってしまったのさ。60を4つも5つも過ぎていたんだから、これは責められない。それにしても監督なしで、あの9人、よくも12回までもちこたえたものだ。ほんとうに新道少年野球団は強かった。」

「大和屋がお嬢さん2人と出てきて、正太郎くんに御祝儀袋を渡した。その光景も覚えていますよ。大和屋が『よくやったねえ、お疲れさま。』とねぎらうと、それまでくすくすんやっていた9人が一斉にわーっと泣き出した。」

「よほどくやしかったのさ。」

「あの9人はいまどうしていますか。もちろん英夫くんのことにはよく知っていますが。」

「ばらばらになってしまったさ。」

中村さんはちょっと目を伏せた。

「一壘をやっていた洋品屋の明彦^{あきひこ}は大学を出て会社員になった。洋品屋は地所を売って千葉のほうへ引っ込んだ。明彦はそこから丸の内の会社に出ているそうだよ。二壘のお惣菜屋の洋一は新宿のホテルでコックをやっている。」

中村さんは新道少年野球団のナインのその後の消息によく通じていた。それによると、三壘のガラス店の忠^{ただし}くんはコンピュータ技師、遊撃の文房具店の光二くんは神奈川^{かながわ}の中学校教師、左翼の豆腐屋の常雄くんは埼玉^{さいたま}で自動車学校を経営しているという。

「この近くにいるのは右翼の魚屋^{ういこ}の誠^{まこと}だけかな。誠は放送局の前で小料理屋をやっている。」

「豆腐屋の常雄くんが自動車学校の経営者とは意外でした。あのときはみんな小学校の6年生、つまりいま、やっと30歳でしょう。その若さで自動車学校を経営するなんてすごいじゃないですか。」

「タクシーの運転手をしているときに、その社長の娘に見染められたらしいね。で、その社長が自

動車学校の経営者でもあったわけさ。」

「なるほど。」

「そういうわけで、みんな新道から出て行ってしまったねえ。ここの地価は高い。3、40坪の狭い土地でも、処分すれば郊外に家を建てたうえ、びっくりするほどのお釣りがかえってくる。だから親たち競争で土地を処分してしまった。お釣りは老後の資金というわけだね。そうそう大和屋も若葉町のほうへ引っ越したよ。」

中村さんはなぜだか、洗濯屋の正太郎くんのことを抜かしてしまっている。新道少年野球団の4番打者で、捕手で、主将の正太郎のことになぜふれたがらないのか。

「正太郎のことは口にしたくないんだよ。」

中村さんはこっちの胸のうちを見抜いたように言った。

「あいつの名前を聞いただけでめしがまずくなる。英夫のやつ、あの正太郎のために畳を85万円分も騙し取られてね、そればかりか、おれが警察に届けようとしたら、『それなら僕はこの家を出て行きます。』なんて言って脅かすのさ。幼友だちをかばうのはいいが、それにも限度ってものがある。」

口にしたくないと言いながら、正太郎くんのこと話題が及ぶと、中村さんはそれまで以上に能弁になった。2年前の冬、ひょっこり正太郎くんが訪ねてきて、畳を注文したという。そのときの口上はこうだった。— 今度、練馬^{ねりま}にある不動産会社で働くことになった。これまでにいろいろと心配をかけてきたが、今度こそ性根をすえてやる決心だから、どうかご安心いただきたい。ところでうちの社は建売住宅をつくって売ってもいるのだが、出入りの畳屋がぐずな畳ばかりおさめてくるので担当者が弱り切っている。それを見て、会社に自分を売り込みたいという気もあって、つい、「畳なら僕におまかせください。」と請け合ってしまった。無理を申してすまないが、明朝まで建売5軒分の畳を都合してはくれないか。— 中村さんはこの口上を肩^{まが}に唾^{つば}つけながら聞いていたという。正太郎くんが昔の友だちから寸借詐欺^{すんしやくさぎ}をして歩いているという噂^{うわさ}を何度も耳にしていたからである。だが、英夫くんに「正ちゃんを信じてやってください。」と頼まれて、息子の親友のためにひと肌ぬぐ気になった。足りない分は同業者を回り歩いてかき集め、翌朝、トラックに乗ってやってきた正太郎くんに引き渡し、そしてそれっきりだった。

「あのとき、正太郎を警察に渡しておけば、豆腐屋の常雄もあんな苦勞をしないですんだのにな。常雄は薬を飲んで自殺しかけたんだ。」

去年の春、正太郎くんは常雄くんの自動車学校に現れた。掃除夫でもいい、どうか雇ってくれという。そこで常雄くんは旧友を事務員にした。夏、正太郎くんは事務室の金庫から400万余りの現金を持ち出し、姿を消した。常雄くんの奥さんも同時に家を出てしまった。正太郎くんはいつの間にか常雄くんの奥さんとねんごろになっていたらしい。常雄くんは自殺を図り、間もなく奥さんがぼろぼろになっ

て戻ってきた。

「奥さんはよほどこたえたらしく、生まれ変わったようになって常雄につくしているそうで、それはめでたい。だがね、あの常雄が薬を飲む光景を思いうかべると、そのたびに涙が出てしかたがない。あいつは弱虫の8番打者でねえ、死ぬということを一番怖がっている子なんだ。その子が死のうとした。よほど辛かったにちがいない……。」

「それで常雄くんはどうしました。正太郎くんを訴えたんですか。」

「それがやはり正太郎のやつをかばうんだよ。警察へもどこへも届け出なかったそうだ。」

「新宿区少年野球大会の準優勝チームの主将だった子が、どうしてそこまで崩れてしまったんでしょうか。」

「それはおれにもわからない。ただ、洗濯屋はしょっちゅうもめていたからね、大将の女出入りで。そのたびにものすごい夫婦げんかになり、そのたびに正太郎のやつは家出をしていたねえ。」

「お父さん、畳の仕上がりを見てやってください。」

皮の肘当てを外しながら奥から英夫くんが出てきた。

「4時にはもう運び出さなくちゃなりませんから。」

「おまえが見て、それでよしということになれば、だれからも苦情は出ないさ。」

と言いながらも中村さんは息子が自分を立ててくれていることがうれしらしく、身軽に立ち上がり、

「ちょうどいま、おまえたちが正太郎に大甘^{おおあま}だって話をしていたところだ。それにしても新道少年野球団は強かったねえ。」

と奥へ入った。

「お父さんは間もなく隠居しますね。英夫くんに一目^{いちめく}も二目も置いているもの。いまのやりとりを聞いていて、そう思いました。」

「だとしたら正ちゃんのおかげかな。」

英夫くんは火鉢に手をかざした。右の指には針だこがいくつもできている。

「正ちゃんに85万円、騙し取られてからですよ、本気で仕事をするようになったのは。なんていうのかな、正ちゃんのつくった穴を一日でも早く埋めなくてはと思い、それで仕事に精を出すようになったというところかな。常雄にしても、正ちゃんを憎みながら、感謝しているところもあるだろうと思うんです。父は常雄のことも話したんでしょう。」

わたしはうなずいた。

「常雄の奥さんは家付き娘を鼻にかけた高慢ちきな女だったんですよ。それが正ちゃんと問題を起こしてから別人のようになったんです。正ちゃんは一見、悪^{わる}のように見えるけど、やはり僕らのキャプテンなんですよ。結局は、僕らのためになることをして歩いているんだ。」

「決勝戦までいっしょになってたかうと、そこまでチームメイトを信じるようになるのかな。うーん、わかるような気がする。」

「おじさんにはわかりません。」

英夫くんはわたしを見すえて言った。

「父にもわかりません。父は土手の木陰で試合を見ていただけですから。僕は中学でも高校でも野球をやっていた。高校3年のときは西東京大会の決勝まで行きました。でも、あんな思いをしたのは、あのときだけです。」

英夫くんの強い口調に^{けが}気圧されて、わたしは少し体を引いた。英夫くんは軽く^{うな}唸りながら言葉を探しているようだったが、やがてこう切り出した。

「口に出すと、なにもかも嘘^{うそ}になってしまうような気がするんですが、ええと、そう、準決勝も決勝も新道チームのベンチは三塁側でした。ベンチには屋根もなにもなくて、ただ、木の長い腰掛けが備えつけられているだけです。」

四ツ谷駅を新宿側に出て外堀通りをだらだらと^{いちがや}市ヶ谷のほうへ下って行くと三角形の公園がある。そこが外濠公園野球場だ。公園は外堀通りから一段低い堀を埋めてつくられている。当時は、野球場はまだ金網で囲われてはおらず、外堀通りから土手を下りて球場に立つことができた。土手には桜の木が植えてあったが、この土手が一塁側とネット裏スタンドになった。つまり三塁側のチームはいつも陽に^ひ灼かれていなければならないが、一塁側のチームは少なくとも自軍の攻撃中は桜の土手のつくる日陰の下で汗をふくことができる。あの夏の1日、三塁側に陣取った新道少年野球団はきつと死ぬほど辛かったろう。

「……決勝戦の6回ごろだったと思いますが、ベンチに戻ってぐったりしていると、さっと涼しくなりました。見ると、正ちゃんが僕の前に立って日陰をつくってくれているんです。正ちゃんにならってナインが僕の前に立ち始めました。これが12回まで続いたんです。僕が完投できたのは西日をさえぎってくれたあの日陰のおかげです。途中、常雄がふらふらっとしかけましたが、そのときも正ちゃんが言いました。『常雄も日陰に入れ。遠慮するな。これはキャプテン命令だぞ。』って。パレードのとき泣いていたのもうれしかったからです。自分たちは日陰なぞあり得ないところに、ちゃんと日陰をつくったんだぞ。このナインにはできないことはなにもないんだ。そんな気持ちでいっぱいでした。その気持ちはいまでもどこかに残っていると思います。だから……。」

中村置店から、わたしは外堀通りを市ヶ谷へ向かった。金網越しに野球場を見ると、木枯らしに吹き上げられた砂煙がグラウンドを走り回っている。振り返って西を見ると、大会社の大きなビルが野球場に覆いかぶさるように立っていた。この十何年かのうちに、ここには西日が差さなくなってしまったようである。

(5) 【第25回全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業への思い】

板野中学校 3年B組担任 森口 健司

《特別公開授業》

全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業、16年前徳島市徳島中学校において第9回全日本中学校道徳教育研究大会が実施されたとき、大川雄哉先生（現・立江中学校長）が、当時の羽浦中学校の3年B組の生徒と、井上靖の作品「投網」の授業に取り組みましたということは、中学校道徳教育研究会の事務局を担当するようになって何度となく聞いていた。しかし、私の中には何百人もの参会者の中でしかも体育館の真ん中に教室を移動して、生徒の活動が中心となる道徳の授業が成立するのかという思



いしかなかった。特別公開授業という舞台は全く私の想像の範囲を遙かに越える世界の出来事であった。その授業を16年ぶりに第25回全日本中学校道徳教育研究大会において実施するという。そしてその授業者という話があったとき、そんなことができるのかという震えるような緊張感と、本当の思いを語り合う同和問題学習を共に頑張ってくれる板野中学校の生徒たちとならばできるのではという二つの思いが繰り返し交錯していた。授業をすることが決まったとき、私は学級の生徒たちの頑張りを信頼して自分のすべてをぶつけていこうと決意を新たにした。



特別公開授業の授業者として内定してからの1年余り、私はさまざまなプレッシャーとたたかい続けた。今までの人生の中で最も忙しく、最も重い一日一日を過ごしてきたように思う。その厳しい毎日の中で最も苦しい思いをしたのは、全国大会が3ヶ月後に迫ったにもかかわらず資料が決まらず、揺れ続けた7月から8月の始めにかけてであった。

《「瀬戸のかじこ」への思いを土台として》

私は2年生より生徒たちと求めてきた人間の生き方に関わる思いを生徒たちが、徳島県内の先生方にももちろんのこと、全国の先生方にも訴え語っていく授業がしたかった。その生徒たちの人間の生き方に関わる熱き思いは、同和問題の学習をベースにして築かれてきた思いであった。道徳教育の全国大会、しかも特別公開授業という大きな道徳教育の舞台で、同和問題、差別問題、人権問題をずばり出す資料はやらせてもらえないだろうという覚悟はあった。でも、そのような授業の中にあっても、どうしてもこだわって自分の意思を押し通してやらせてもらえたらと思った資料がある。資料「瀬戸のかじこ」（来栖良夫作）である。

この作品の一つ一つの場面に、かつて出会った生徒の思いがいつぱいつまっている。私自身にとって「瀬戸のかじこ」は、第25回全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業の幻の資料となった。私の道徳授業と「瀬戸のかじこ」に寄せる私の思いを記しておきたい。

私にとって道徳の授業とは、人間としての生き方、あり方を生徒と共に学んでいく営みであり、それは生徒と共に生きることを意味と人間として生きる喜びを求めていく営みである。道徳の授業の意味を考えると、二人の生徒との出会いが懐かしく思い出される。一人は女子生徒（A子）、A子は私が初めて学級担任をしたクラス（2年）に2学期中頃転校してきた生徒である。家庭崩壊という状況から問題行動を繰り返す、心に涙をいつぱい溜めた生徒であった。転校後10日程で修学旅行が行われたが彼女は参加しなかった。2年生全体が修学旅行に行っている4日間を学校で過ごすことになる。私は修学旅行出発の前日、1冊の本を彼女に託した。灰谷健次郎著『兎の眼』であった。彼女はその本の感想を次のように記していた。

《“パラ……” 私は1枚目のページをめくって、“ああ、長い文章だ”と思いながら読んでいった。「鉄三」、私はこの子を想像しながら読んでいった。私ははじめ小谷先生と同じ気持ちで、“この子はなんちゅう子かいなあ”と思った。“パラパラ……”と読み続けた。毎日毎日読むにつれ、私自身、鉄三や小谷先生の本当の気持ちを見つけることができた。鉄三や小谷先生は、自分をかくさないで本当の自分をぶつけあい、本当の気持ちをわかり合おうとしている。この小谷先生はきれいごとですませようとしなない先生だと思った。私たちのまわりにはきれいごとですまされる場合が多い。しかし、それに気づかず何もしないで終わる。だれも何もしない。私はこんな生活がいやだった。私は思う。藍中に足立先生や小谷先生みたいな先生はいるのだろうか。先生と生徒と一緒に何かをやっていくことができているのだろうか。私は「兎の眼」を読んで作文をいつぱい書きたいと思った。自分の思ったまま書いて、間違った考えを持っているところは直し、自分の気持ちをしっかりと持ちたい。そして、作文を書いて、本を読んで、私はいつもそのときそのときで自分を成長させていきたい。私は今まで間違った考えのままやってきた。そ

のために今の自分になった。私は本は好きだ。作文は上手な文章を書くことができないからきらいだけど、書くことは好きだ。「兎の眼」、こんな本ともっと早く出会っていればよかったと思う。こんな感じの本は初めてだ。転校してきたみな子ちゃんと私が重なって見えたときがある。足立先生プラス小谷先生が先生のように思えた瞬間があった。みな子ちゃんという転校生に、本の中ではみんながみんなの中に入っているいろいろな苦勞があったけど仲間になれた。私のクラスはどうなるだろうか。私は素直に自然に話をしていくことができると思う。早く話がしたい。最後に、「兎の眼」を読んで、これからいろいろなことを作文に書いてみたいと思った。》

「兎の眼」を通してA子との会話が始まり、心の交流ができていったと思う。そして何よりA子との信頼の絆をつくりあげることができたのは、A子が私の問いかけや語りの中で、生き生きと目を輝かせた道徳の時間があつたからだと思う。A子が道徳の時間について語った言葉が心に残っている。

「道徳の時間は数学や英語と違って百点も零点もない。自分の思うままに感じるままに自分を表現できる。そして、みんなの本当の思いに触れられることができるから、道徳の時間が好きなんだ……。」

私は私を信頼し必死に自分をぶつけてくるA子の姿に励まされながら、週1時間の道徳の時間を精一杯すばらしいものにしたいと頑張り続けてきた。そして、道徳の時間の充実が、クラスの仲間全体の生き方を励まし、人間として生きることを意味を問い続けていく土台となるものが、道徳の授業を通して培われてきたと思う。

もう一人は男子生徒（B夫）、校内暴力の問題が新聞紙上ににぎわしたときの生徒である。B夫も問題生徒のリーダー格として存在していた。B夫を3年で担任した。本当に揺れに揺れた1年であった。厳しい状況におかれたこともあった。さまざまな困難な問題を抱えながらも、B夫の生き方を励まし、B夫に生きることを意味を自覚させていったのが、まさしく人間としての生き方を求め続けてきた道徳の時間であった。

B夫は道徳の時間、いつしか私に食らいついてくるような眼差しをおくってくるようになった。道徳の授業を中心に据えたお互いの存在を人間として認め合う語らいの教育がなかったならば、B夫と私との今の関係はなかったであろうし、道徳の時間に寄せる情熱もこれ程強いものにはなっていなかったと思う。B夫が道徳の時間を安易に考える教師に怒りをぶつけるかのように語った言葉が今も私の胸につき刺さっている。

《先生、数学や英語の時間、授業を受けるのがしんどなって、授業さぼつたろうかと思うことがある。そやけど、道徳の時間だけはさぼりたいや、さぼろうや思うたことがない。道徳の時間はなぜか感動した。力が湧いてきた。道徳の時間は大事にせないかんと思った。》

私はこの言葉の奥に秘められた思いをしっかりと担ぎ、生徒一人一人の本当の思いに寄り添いながら、道徳の時間の重要性を訴えていきたい。

私に道徳の時間のあり方について目を開かせてくれたA子やB夫をはじめとするかつて学級担任として出会い、共に道徳の授業に取り組んでくれた生徒たち、その多くの生徒たちの励ましや

支えの中で生かされてきたと思う。そして、その頃その私を大いなる力で包み育んで、私に繰り返し繰り返し人間そのものを語り聞かせてくれた先生が存在した。佐藤文彦先生（元徳島県麻植郡鴨島第一中学校校長）である。

佐藤先生との出会いは、私に私の生きる道を明確に示してくれるものであった。佐藤先生の言葉の一つ一つが、私の道徳教育に取り組む大きな支えとなっている。佐藤先生との出会いがあったからこそ、A子やB夫をかけひきなしに丸ごと愛することができたと思う。佐藤先生はまさしく私の教育の師であり、人間としての生き方を求めていく支えである。

私は佐藤先生の教えに励まされて、多くの生徒たちに対する熱き思いが大きくなっていったと思う。その佐藤先生が、一つ一つの言葉や文節の意味をかみしめながら教えてくださった資料の一つが『瀬戸のかじこ』であった。

私が前任校（鳴門市瀬戸中学校）に赴任した昭和62年から2年間、瀬戸町内の3小学校と瀬戸中学校とが連携して道徳教育の研究に取り組むようになる。道徳教育協同推進校として文部省の指定を受け、道徳教育の研究にかかわる機会を与えられることになった。特に私は道徳教育主任として数多くの研修の機会に恵まれた。

学校全体が道徳の授業研究に取り組んでいくために、まず私が道徳の研究授業に取り組んだ。その時に行った授業が佐藤先生から以前ご指導をいただいていた「瀬戸のかじこ」であった。その授業では生徒一人一人の生活にかかわって、資料「瀬戸のかじこ」に寄せる一人一人の思いが語られていった。

貧困と耳が悪いということのかじこの仕事につくようになった村田正美に寄せてある生徒が次のように語る。

《実は、ぼくが、石原光男、村田正美、伊藤三郎、佐々木民治の4人の中で、一番つらさがよくわかるのは、村田正美という少年です。なぜかという、ぼくとこの少年は一つ似ている点があるからです。それは、耳が悪いということです。どうやら、村田正美は両方らしいけど、ぼくは右の方が悪いのです。ぼくは全く聞こえないというわけではないけど、ちょっと聞きとりにくいのです。そこで、ぼくは精密検査をした方がいいと思って、耳の病院へいったところ、その病院の先生に「耳が悪い。こんな耳じゃ、パイロットや駅員には、なれんなあ」というようなきついことを言われたことがあります。つまり、村田正美とぼくは、同じような感じで一人の普通の人間としては、見られなかった。ぼくは正直いってそのことがかなりショックでした。本当につらかったです。一人の人間として認めてくれないということが、たまらなくつらかったです。でも、母の協力もあり、ぼくは立ち直りました。「それがなんな！」と思って、「歯を食いしばって生きていった」と決意をしました。ぼくは、今でもそう思い続けています。村田正美は、自分が認めてもらえないと、自分をあきらめて、閉き直っていたけど、後に二人の仲間に支えられて、勇気を奮い起こし、強く生きる決心をして島を逃げました。ぼくも、多くの仲間と共に強く生きたいと思っています。》

ハーモニカを心の支えとして生きてきた伊藤三郎に寄せて次のような発言がある。

《瀬戸のかじこの中に、伊藤三郎という少年が出てきます。この少年は、ハーモニカを大切に持っていました。感化院の小使さんがくれたものでした。でも、この小使さんにとって、そのハーモニカは、死んだ子供の形見でした。そんな大事なものをなぜ感化院なんかにした子供にあげたのだろうかと思いました。ぼくはこの話を学んでいく中で、それは人間の本当の優しさであることがわかりました。ぼくには、なかなかできない行動だと思います。でも、ぼくはこの優しさというものを早く身につけたいです。この優しさがあつたからこそハーモニカが、三郎の生きる支えとなり、このハーモニカがあつたからこそ、島を抜け出すまでがんばれたのだと思います。もし、ハーモニカがなかったら三郎は、島を逃げ出すことさえも、また、その勇気さえもなかっただろうと思います。そのころは、もちろん、今の時代でさえ、そんな優しさを持った人は少ないのに、この小使さんは本当にすばらしいと思いました。ぼくは、その優しさを学んでいきたいと思います。》

《感化院の小使さんが、別れるとき伊藤三郎に「島へいったらふいて遊べ。そして、よう働いて、立派な漁師になれよ」とポケットに押し込んでくれたハーモニカは、三郎の生きる支えであり、心の支えであることを学んだとき、私は、中西のおばさん（当時の瀬戸中学校の用務員さん）のことをふと思いました。この前、創立40周年に記念のリボンを作っていたとき、中西のおばさんが、毎年卒業生のために一人一人のリボン作ってくれていることを知りました。「みんなにしてあげることは、こんなことしかないよ」とたくさんのリボンを中心に込めて作ってくれていることを知りました。私たちは小学校のときから、自分たちでリボンを作っていました。だから、ほかの中学校が、リボンを買っていたなんて知りませんでした。私は、中西のおばさんの手作りのリボンの話を聞いたとき、おばさんの優しさが、私の心の中にとっても温かいものとして伝わってきました。私たちは、おばさんの優しさに包まれてとても幸せだと思いました。私も、三郎のようにおばさんの優しさに支えられながら生きていると思います。》

この学習は、まさに人間としてのあり方、生き方を生徒一人一人に問いただす学習となっていたと思う。生徒一人一人の発言を大切に授業記録としてまとめ、佐藤先生に読んでいただいた。

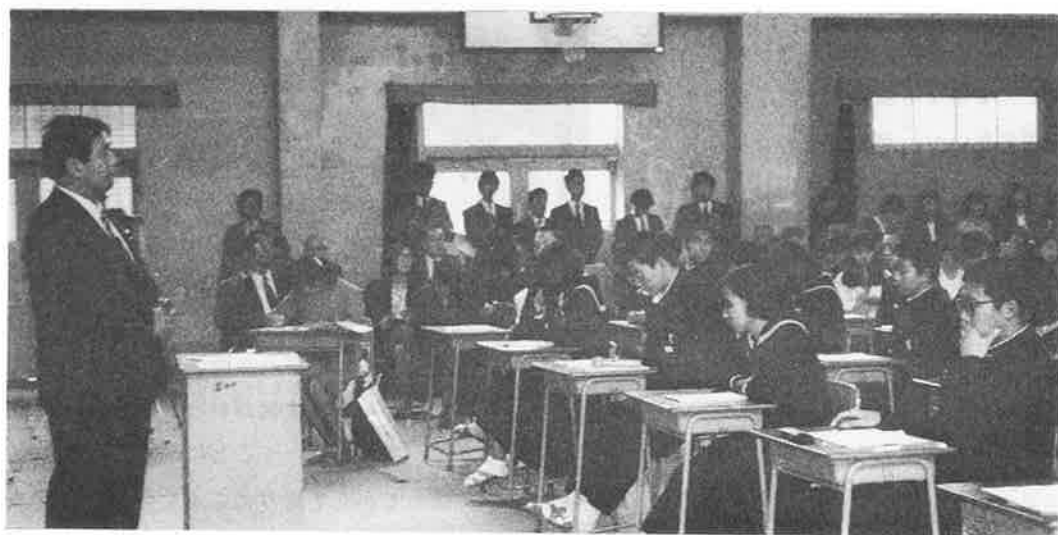
数週間後、佐藤先生はその授業記録を書き写されて一冊の冊子にまとめられた。佐藤先生は「先生の授業記録、先生の願いや子どもたちの思いをより強く受けとめたかったから、私の手で書いてみました」と言われ、佐藤先生は先生自身が書かれた授業記録の冊子をくださった。本当に胸がいつぱいになった。



私は私を励ますように私の思いを受けとめ、私に教師としての生きる指針を示してくださる佐藤先生に生かされながら、私は私の日々の教育実践に自分のすべてをぶつけることができたように思う。

その佐藤先生は「瀬戸のかじこ」の授業をした翌年の1月30日にご逝去される。年明けに入院されたということを知り、しばらくしてから大変厳しい状況だと言うことを聞かされていた。佐藤先生は「瀬戸のかじこ」の授業記録を書き写してくださったとき、死期が近づいておられるということを知っておられたのだろうか。さまざまな思いがこみ上げてくる。1月25日にお見舞いに行く。「昼間は40℃近くの熱が出ているんですけど、今は熱は下がっている」と言うことで10分程話をさせていただく。佐藤先生はその時も、私のクラスの生徒のことを聞いてくださった。私が今生徒たちと取り組んでいる道徳の時間のようすを語ると、佐藤先生は「先生の教室は教育という世界を超越していますよ。本当の教育とは、互いの存在を尊敬し、信頼の中から築かれていきますね。」と見舞った私を励ましてくださる。見舞いにきた私は逆に励まされ、この感動を明日早くクラスの生徒たちに伝えたいと思い病室を後にした。人間はどこまで美しくなれるのだろうかとつくづく思う。帰りの中央病院のエレベーターの中で、熱いものがこみ上げてきて胸がいっぱいになっていたことを懐かしく思い出す。佐藤先生との最後の時となった1988年1月25日は、どんなことがあっても忘れることはない。

私は佐藤先生との出会い、私の生き方を変えた掛け替えのない出会いであつたと思いつけている。そして、佐藤先生の言葉の一つ一つが、私に生き方を励まし私の心の中に生き続けていくと思う。その年の元日にいただいた佐藤先生からの最後の年賀状に記されていた言葉「美しさを求めて生きる人生を」この言葉の意味を求めて、今、道徳の時間に自分を語り、自分のすべてをぶつけているんだなと思う。



生徒たちが生きることの意味を求め、生きることの喜びを実感していく。そんな道徳の時間を創造していくために、私は私自身の生き方を確かめていくように『瀬戸のかじこ』の学習に毎年取り組んでいる。「瀬戸のかじこ」の中には佐藤先生の思いがいっぱい生きていると思う。佐藤先生の思いを確かめ、自分の歩みが確かなものであるかどうかを自分自身に問い続けるものとして、今年も「瀬戸のかじこ」の学習に取り組みたいと思った。

以上が第25回全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業において「瀬戸のかじこ」の授業を願った私の思いである。

《資料「ナイン」との出会い》

この作品「瀬戸のかじこ」への思いは佐藤文彦先生への思いでもあった。この思いが土台となって「ナイン」（井上ひさし作）との出会いが、私自身の生き方にとって意味のある感動的なものとなっていった。

先輩の先生方の励ましやご指導の中で、私は井上ひさしの作品「ナイン」に8月始め出会った。多くの先生方の励ましやご指導の中でこの作品ならという思いが日一日と強くなっていったことが懐かしい。私自身が何度も何度も繰り返し読んでいくうちに、この作品が段々と好きになっていった。

この「ナイン」の授業は生涯忘れることはない。この資料に重なって私を支え励まし続けてくれた先生方の姿が思い出される。特別公開授業に向けての苦しみが私に人間のあり方や生き方を教えてくれたように思う。私を取り巻く多くの人々の励ましや支えの中で生かされているんだということを思い続けた全国大会までの日々であった。

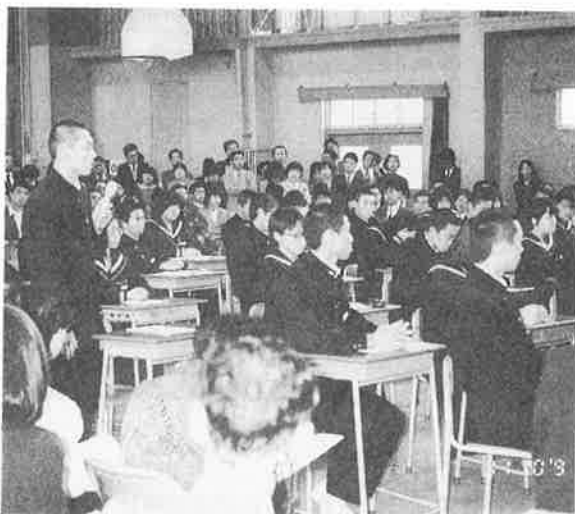
この資料なら私の思う授業ができるという確信がいつしかもてるようになった。生徒たちは新道と生徒たちの暮らす板野町を重ねて思いを語っていく。H夫が、「この



ナインの資料は何か僕たち3年B組にあてはまると思います。これから徳島県も板野町も発展していくと思うし、やっぱり昔の板野がよかったなあと思うことがあると思います。僕たちは中学生だけど、これから高校へ進学したり就職してでも、こんなナインのような関係になっていきたいなあと思います。」と語る。そのH夫の思いに応えてM夫が、「H夫君が言ったように、板野町とか徳島県とかもだんだんと変わっていくと思うんです。変わっていくことによって、昔の方がよかったなあという気持ちも残ると思うけど、大きくなってからも周りにこんな仲間がいて、互いに支え合って生きていくことができたらすばらしいと思います。これから高校へ行ったり就職したりして、周りの仲間に自分の心を開いて話のできる人がいなかったら差別されるかもしれ

ません。だけど、今はこの周りに仲間がいるからどんなことがあっても頑張っていくことができます。実際、将来負けそうになったときも、今のこの仲間に相談できるような関係をつくっていききたいと思います。」と自分の思いをぶつけていく。

生徒たちは今までの同和問題学習を土台として、作品「ナイン」に寄せる思いを語っていく。「先生、どうして同和問題の学習をしないんですか。全国の先生方に同和教育の大切さや、同和問題学習に取り組んだ私たちの喜びをわかってもらえるチャンスじゃないですか。」と、私に訴えたY子は、「ナイン」の授業の中でもその思いを語っていく。



《私たちがこの富田中学校にきて授業をすると聞いたとき、私たち3年B組は同和問題の学習をするもんだと思っていたのに、

こういう直接同和問題に触れない資料をするということでもちよっとやりにくいなあと思っていたけど、結局同和問題の学習も道徳の学習も一緒に人間の生き方につながっているものだから、みんないろいろな意見が出たと思うんです。結局人間というものは支え合ったりして生きていかなあかんもんやし、だから、私は社会の流れとかに流されんようにして今までのみんなとの関係を大切に守りたいんです。私にたくさんの子が自分の一番つらかった部分だった部落に生まれたということを書いてくれたけど、私は絶対にその子たちを裏切ることがないように、その子やが西日に照らされて苦しむようなことがあったら、さっと日陰をつくれるような人に私はなりたいと思います。》

そのY子の思いにつなげてS子も語る。

《今までの同和問題学習で築き上げてきたクラスの信頼関係と平行してこの「ナイン」について考えていくと、ナインの奥に流れているものがよくわかってきたんです。やっぱりこの資料「ナイン」だけで考えていたら、今のような発表とか同和問題学習と関わる私の発表とかはなかったと思います。そして、みんなが心を一つにして板野中学校全員で同和問題について学んできたからいろんなことが考えられて、こうやって発表ができるんだと思います。》

全日本中学校道徳教育研究大会の特別公開授業、生徒たちは私の思いを担いで共にたたかっているように思えた。繰り返される発言の中で、私は「ありがとう」という思いをかみしめながら、生徒一人一人の発言を体全身で受けとめていった。生徒たちの中には同和教育の営みをわが生命の営みとして訴え続けた私の思いがしっかりと入り込んでいるんだと思った。

「ナイン」の学習の最後にY子が語った言葉、「今日みんなすごく輝いていたと思います。」その言葉に応えて、私は「3年B組の絆」と思いを板書する。それで授業は終わった。



《大会前日》

最後に授業前日、生徒たちに授業に向けての思いを訴えた原稿を紹介する。

- ・10月31日（木）全日本中学校道徳教育研究大会、「ナイン」の学習をすばらしいものにしよう。
- ・中学2年生より取り組んだ全体学習の成果を十分に発揮しよう。
- ・堂々たる姿勢で胸を張って、しっかりと前を見すえて語っていこう。

（下を向くな、ぼそぼそ言うな自信をもって胸を張れ）

- ・「よく聞き、よく話す」を互いの合言葉として頑張ろう。

（仲間の発言に一人一人の発言を重ねていこう）

- ・自分の考えをしっかりと語っていく。

（下手でもよいからていねいに自分の考えを述べること）

- ・発言で自分を育て、学級を作る。

（正解が大切なのではない、自分としてのしっかりとした考えを言うことが大切なことだ）

- ・富田中学校へ行く、自分たちはだれもしたことのない授業をするんだという誇りと自信をもって、富田中学校において先生方に対する挨拶や応答も堂々とやって行こう。全国大会の堂々たるみんなの姿が、みんなをより大きなものとしてよりたくましく育てていく。

- ・授業が終わったら自分の思いのすべてが表現できるような感想がもてるように、授業の一場面一場面に自分の思いを重ね、自分の思いをぶつけていこう。

（互いの存在を讃え合い、よくやったと言える授業にしよう）

- ・長い人生の中でもめったにない檜舞台を経験する。みんなが主役であるという誇りをもって頑張りたい。

- ・新道少年野球団が優勝戦を戦ったように、3年B組が一丸となって試合（授業）をやっていこう。そして、堂々たる準優勝を勝ち取ろう。